

巖島名所案内記
全

特32

768

025765-000-2

特32-768

巖島名所案内記

山本 寅吉/編

M29

ADC-3301



奉壽

中教正
櫻戶玉緒

皇神乃字尊比

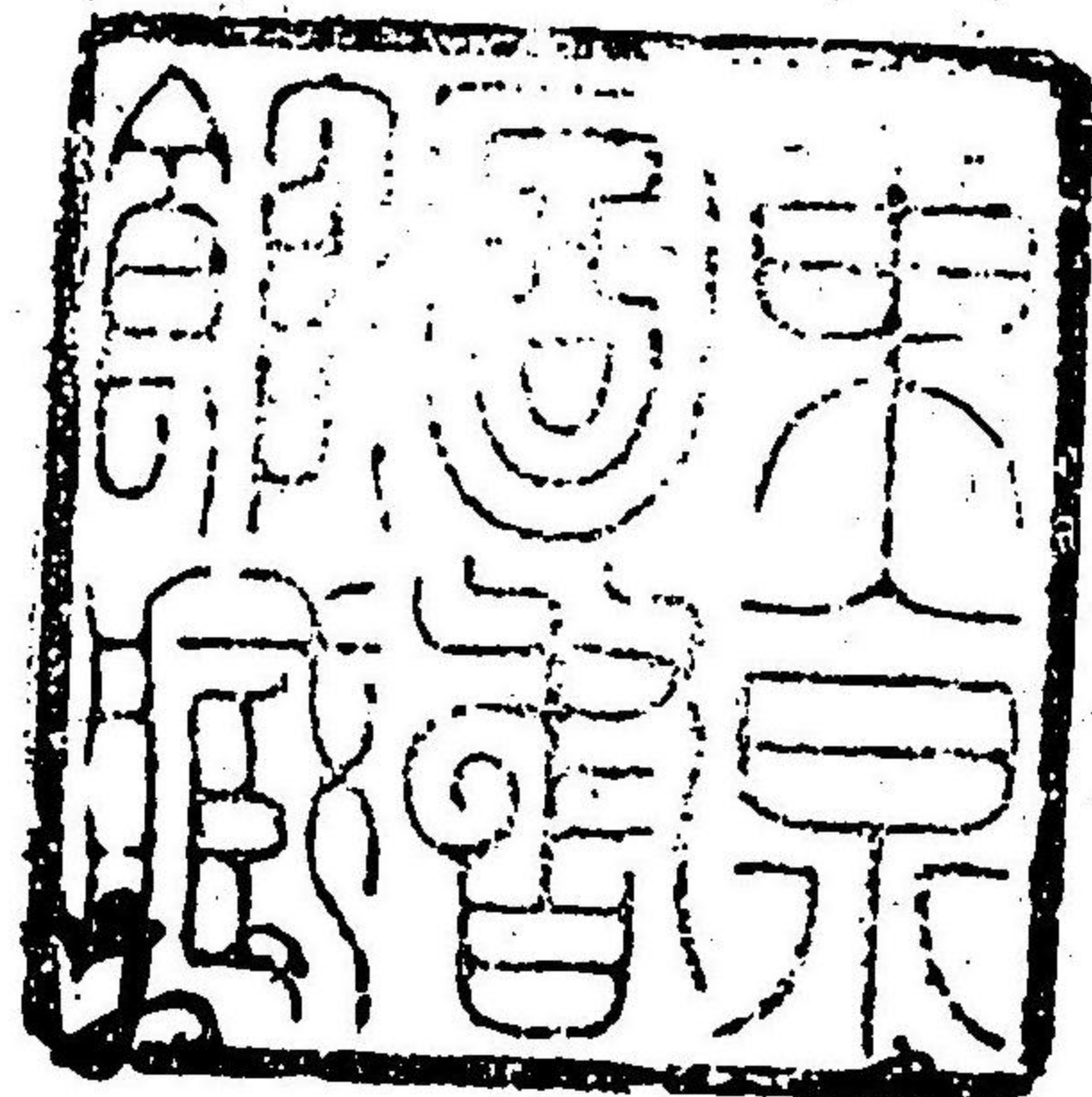
尊乃天津日

日繼乃世

萬代未傳

神宮權官司正六位岡部護君顯辭

之



之

之

之

之

海

咽

之

之

之





Handwritten signature in cursive script, located below the seal.

Handwritten signature in cursive script, located below the seal.

Handwritten signature in cursive script, located below the seal.

酒 (Shu) - The right character of the pair 'Shu' (酒), written in bold cursive calligraphy.

酒 (Shu) - The left character of the pair 'Shu' (酒), written in bold cursive calligraphy.

Handwritten signature in cursive script, located to the right of the main characters.

Handwritten signature in cursive script, located to the right of the main characters.

Handwritten signature in cursive script, located to the right of the main characters.

Handwritten signature in cursive script, located to the right of the main characters.

凡 例

- 一 本誌は究めて簡約にして。孝家婦女と雖も淺易之。されど現今存在の神社佛刹名及古跡等を一も洩すなし然るも明治四十年改革の陸奥省の神社及び佛刹へ合併せられたる所。そは其部不記すを又る也。
- 一 神社佛刹名及古跡の錯誤せるは。本社を始めとして各々其版面の便不図に記したるをのを知る也。
- 一 各々圖を挿みたるは。各家として非しふがら名を知らしむるの便にそふにる也。
- 一 當社田原に相とる傍馬敷等なる中殊不著名なるものを寫出す画面の説の誤失可悉を容す勿れ只關巻に云ふらへる説を擧るのみ。

嚴島名所案内記

日本三景の一。山陽安藝國嚴島は廣島を去る西五里の海中に位し。佐伯郡に屬せり。島の周囲七里。西北を面とし東南を背とす。遠くは伊豫周防の山岳を望み。近くは阿品より一里を渡りて達す。能美。江田の諸島に對して。四時の風景頗る絶佳なり。人戸一千余本社のかたはらに市をなせり。該島は舊。恩賀島又御香島或は霧島。我島と稱へ來りし説あれど定かならず。御神の鎮座し後。其神号の市杵と通はして遂に伊都岐島と號たるならん。後世專嚴島と稱へたり。又宮島とも云。前説の異名思賀島御香島などは。道之記と云書に小野篁左原業平等の古歌によりて此稱呼ありと云。安藝名所歌枕名寄と云書に我島。汝島とあり此島佐伯郡海中にありと云是迎確ならず。霧島と云も何の證なし何れも杜撰ならずや。併し聊かたよりとなる可を後に記すべし。

抑も當社本殿に鎮り座す。三神に。掛巻もかして建速須佐之男命によりて所成市杵姫

命。田心姫命。湍津姫命にましまして今明治廿九年を去一千三百〇四年の古昔則人皇三十四代推古天皇即位癸丑の年。安藝國佐伯郡の住人佐伯鞍職と云翁島の邊に魚釣しありしに。西の方より來れる船あり。やがて磯邊に近寄けるを。翁つらく其船を見つるに殿降に赤幣立たる殿瓶を置て三神の姫おはします。鞍職に宣たまはく。吾はこれ古へ三柱の大御神より建速須佐男命に宣ひき。汝命者所知海原矣事依也。をうけ繼て此島に鎮護す汝朝廷に奏て此島に宮を造すべしと。鞍職都に上り此神託を奏聞す。時の皇(推古天皇なり)より社殿造營の勅命ありければ。鞍職畏りて歸り。大宮造るべき地を定めんと。先新船を造り船前に五百津真坂樹。五百津野瀬の八十五玉串を珍の幣帛取かけて。島の浦々を巡り覺に。靈鷲山上より飛來り。船前に進むを以て導の神となし。海濱を漕回り行に竟に三笠濱に止る。よりて此濱の地を打ならし。達近の山に生立る樹を齊斧以て伐採り。高天原に千木高く。新宮造建て。其年の十一月朔常世の神籬と祝定て鎮奉る。

○人皇十一代垂仁天皇御代の古事に。恩賀島に大神鎮ましますと。あるを以て在原業

平の歌に

恩賀島のすかたはおのつから

よもさか島もこゝにありけり

恩賀の字をたぐひなきとくんするは其義理知がたし

御香島と稱ふるも小野篁の歌に

入海の八十浦かけて十島なる

中に香ふかき島は七うら

右香ふかき島とよみたるを御香島と云も中々むりとおもはるべし

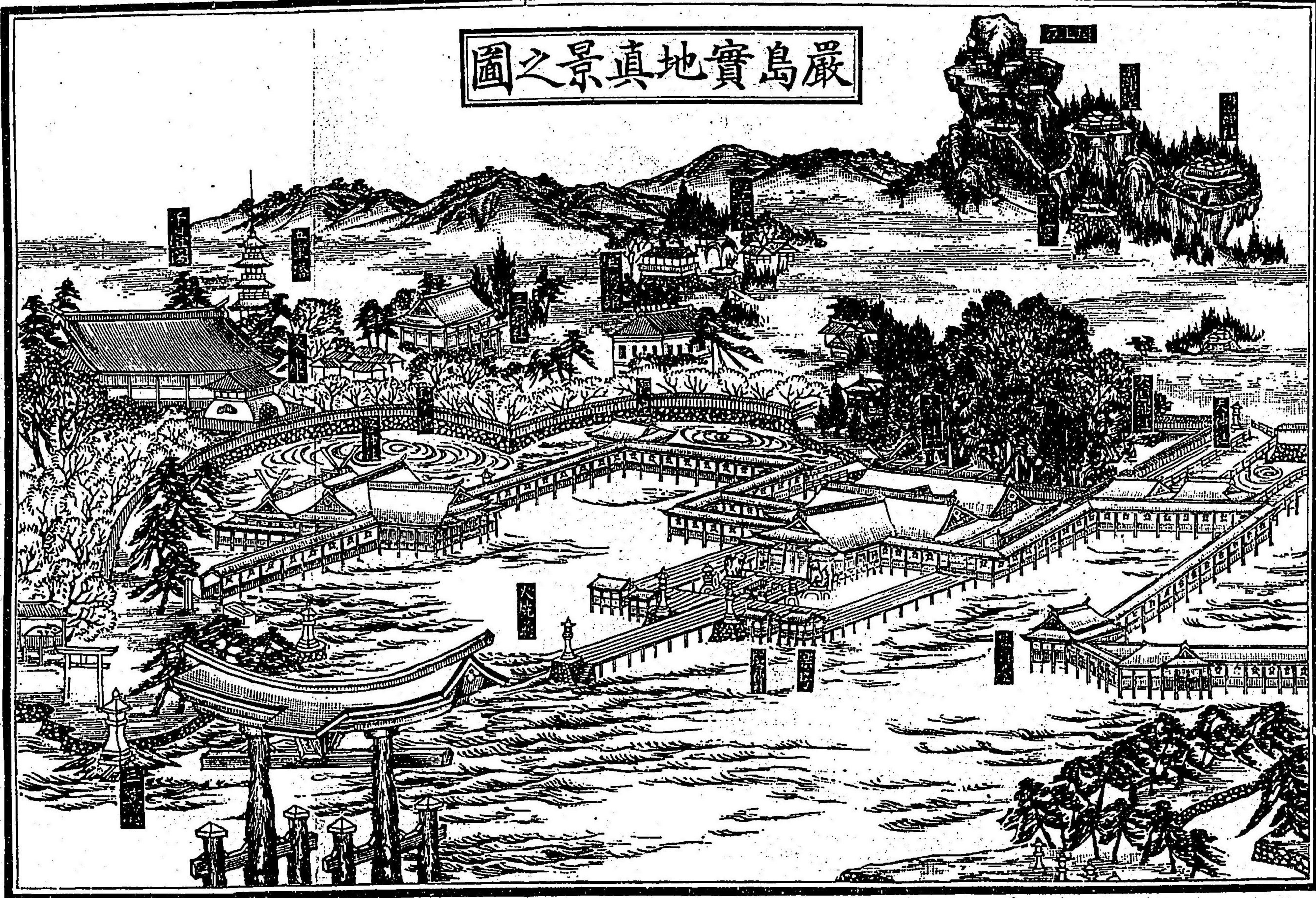
○又神詠なりとて傳ふる歌に

渡海のおさところこそうさたれと

こはわか島にこれはなかし

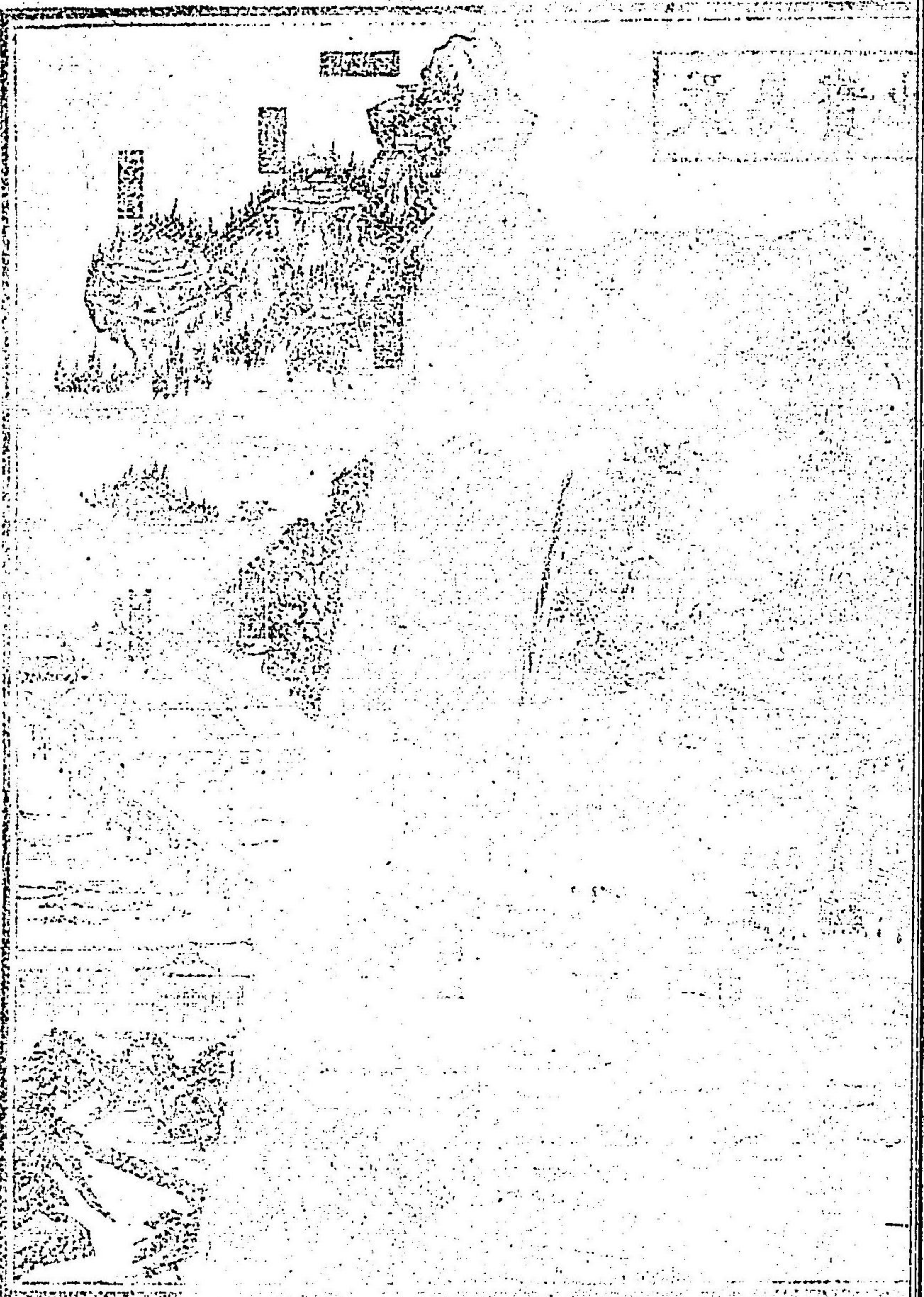
右歌によりて我島汝島の稱あれと殿島をさしたるにあらざることを明に見たり何も古より傳る島稱の證となすにとぼしと云つべし

嚴島實地真景之圖



○又宮島の稱も古くより傳りけり。今は公に嚴島と稱へ斯て創建の後代々の帝より度々修理を加せられ。祭式も嚴に行はせられけるを天文十五年佐伯郡櫻尾の城主源廣就。大内義隆に亡されし時。舊記みな兵火にかゝりて失ひたり。然れども延喜神名式に曰。安藝國佐伯郡伊都岐島神社とあり。三代實錄に貞觀元己卯春正月廿七日と全九年丁亥冬十月十三日と兩度も神階増進の勅を賜り其後正一位に進み玉ふ。佐伯鞍職此宮造建の創より五百餘年を経て。社頭大に荒廢せしを。平相國清盛安藝國に守たりし時。靈夢の告によりて社頭を再建し攝社末社に至まで悉く修造ありて。層一層著しき壯觀を成しぬ。承安四年後白河法皇御幸あらせられ又治承四年高倉上皇も御幸あらせられたり。其後鎌倉將軍家續て足利氏。本國の領主大内。毛利。福島。淺野氏等屢々資を納めて社殿の修理を加へ。祭典怠ることなし。大政一新の後國幣中社に定めさせ玉ひ祭式等も嚴重に改りけるは。明治の御代と俱に實に芽出度こと長なへにかぎりなし

安藝の海いつく島根にうこまなく



参拜順路

さかはゆかないくまのつ代に

○本社本殿

市杵島姫命

祭神 田心姫命

三座 湍津姫命

相殿

國常立尊

天照皇大神

三座 素戔嗚命

○本殿

明神鎮座の正殿をいふ
梁間六間三尺六寸
桁行十三間二尺二寸

○大床

巾 五尺

○幣殿

正殿の前にあり
梁 三間一尺五寸
桁 三間一尺八寸

○拜殿

幣殿の前にあり
梁 六間
桁 七間四尺四寸

○後殿

梁 六間四尺八寸
桁 十三間三尺八寸

○高舞台

後殿の前にありて神殿に向う左右に唐銅の獅子。石燈籠あり
堅 三間四尺
横 三間

○平舞台

高舞台を狭んで左右にあり
平面 百八十六坪

○樂房

左右に分れて平舞台に通る二字各
梁間 二間五寸
桁行 五間五寸

○廊

俗に舌先又火燒前といふ
巾 一間五尺三寸
長 七間一尺三寸

○門客神社

舌先の左右にあり俗に沖惠美須と稱す
祭神 豐勢間戸命 櫛磬間戸命

○社頭明燈

八景の一

廻廊

巾 二間二尺
長 百四十八間二尺

本社の左右に長く屈曲して其一間毎に鐵燈籠を釣りたり。満潮のときは數多の燈光波に映じて光景何にたとへんものなし

水かさにみちくる汐にともし火のかげぞうつれるまじきままでに

よむ人

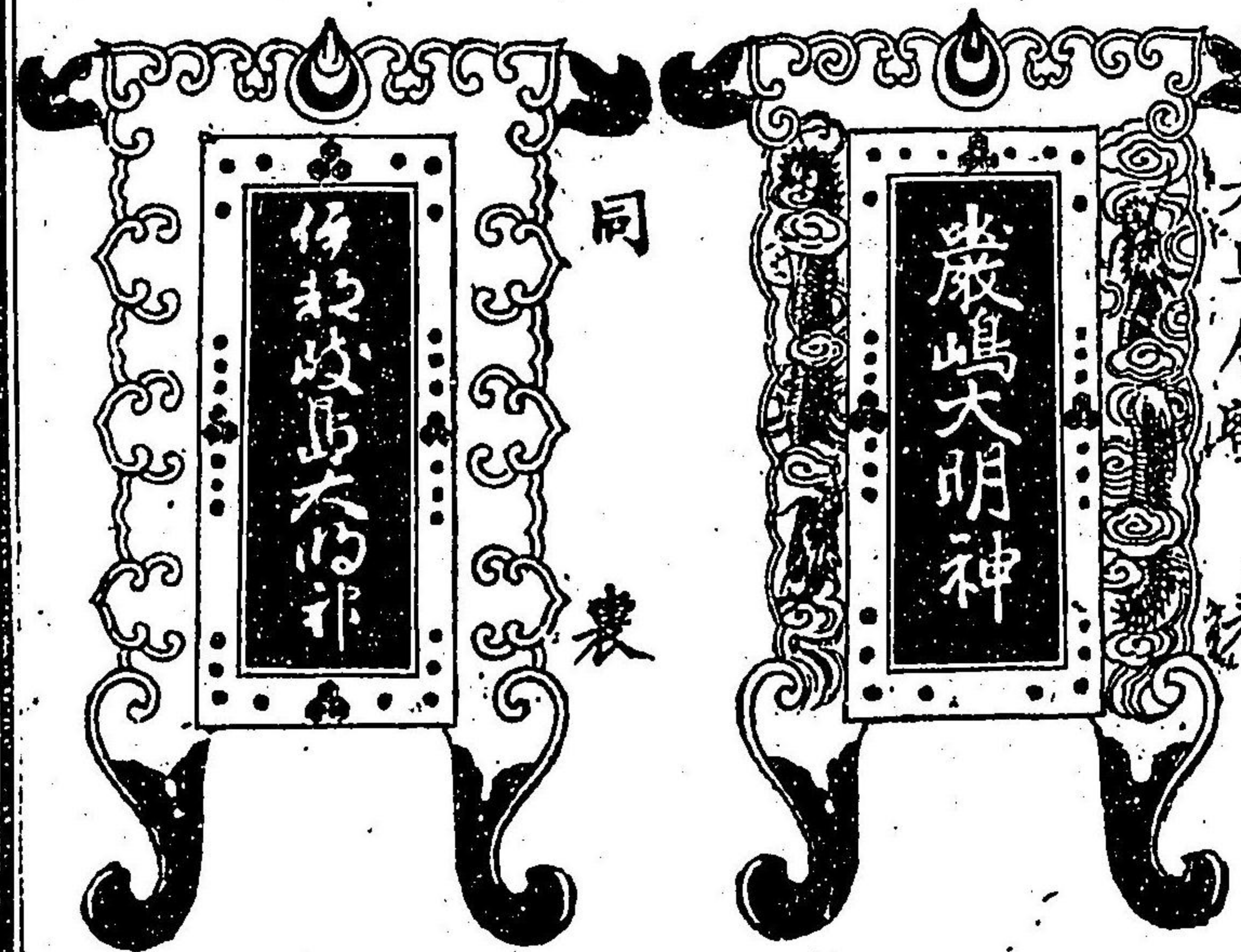
しらす

宮島や燈籠の火にわけやすし

其角

回廊の梁間に。古今名家の書畫無數を仰

大鳥居願表



き見る墨痕古色を帯たれど。美術上大に
参考と爲に足もの少からず依て此所に其
著明なる圖書を出し名家の略歴を附す

此所に出す額は天文十六年大鳥居改造
の時の額にして後奈良帝の御宸筆なり
。大内義隆直筆の状添ふ。今大願寺に

藏せり
抑も鳥居創建の年月日詳ならずと雖も。
往古の額字表は小野道風の筆。裏は弘法
大師の筆たりしが損じて見分がたし是も
大願寺に秘藏せりと。嚴島道之記には櫻
尾の寶庫に藏めありしが神主滅亡のとき
焼失すとあり何れか是か

○扁額 當社に掲る所の繪馬の大小すべ
て幾百枚なるを知らず。されば玉石を撰ば
ず。常に人のよく稱呼する物のみを擧ぐ。
左に記するは見る人の便利に隨ひ東廻廊よ
り西廻廊に至る。其順次は筆跡の甲乙によ
らざるものとす



○張飛の圖 竪 八尺 横 五尺

客人社内陣の外正面に掲ぐ。

絹地形色

古秀の畫 古秀字は士瑩又希賢と號す俗稱八田宮内京都の人 圖中年月日見す
張飛字は翼德涿郡の人身の長八尺 長阪橋の戦に只一騎橋上に馬を立丈八の蛇矛
を横へ大音上げ吾は燕人張飛なり。誰か來て勝負を決せんと呼はる霹雷の如くなりけ
れば曹操大に驚き馬を飛してにげ去りける云々

○俵藤太射蛇之圖 竪 六尺 横 九尺

客人社内陣の外正面脇に掲ぐ

金地彩色

文化元年壬申季夏 素綯の畫

素綯字は伯陵山齋と号す俗稱山口武次郎京師の人

秀那は姓藤原房前公より六代村雄郷の子なり。和州田原の地に生るを以て氏とす。後
儀の字に改む。朱雀院の朝に平將門を誅伐して軍功あり。是より前延喜八年近江勢田
の橋上にて。三上山の巨鯉を射る云々



○三十六歌仙之圖 豎二尺餘 横一尺

餘客人社組入左右に掲ぐ 畫は土佐光信 書は實隆公の御眞筆なり。實隆公は西三條内大臣正二位道隆院と號し法名覺空と稱す。土佐光信は藤原廣周が子なり。土佐經隆より五代の孫累代細筆を以て美術畫の名最も高し。此所に三十六枚の内二枚を出す。在原業平朝臣は行平の別腹の弟なり。母は伊豆内親王。父は平城天皇の皇子阿保親王なり。源重之父は清和天皇の皇子。貞元親

王之御子兼信なり。伯父兼忠の養子となれり

○神鴉 黒湖畫 ○狛犬 丹倫畫

○孔雀緋鸚哥之圖 豎 八尺 横 五尺

客人社正面に掲ぐ 安永七年戊戌五月吉日江都日本橋通三丁目唐木茂兵衛と記し

あり年六十三。

宋紫石寫 絹地彩色 宋紫石字は君卿雪溪と號す。書法を清人宋紫岩に學んで

宋紫を胃す江戸人

孔雀は交趾廣州の南方の諸山におほし高山喬木の上に生ず。雌は尾短くして金翠なし

。雄は五年にして尾の長すること二三尺。背より尾の先に至るまで圓き文あり。五綵

の金翠をなす。尾に翬あり若し目に入れば人をして昏翳せしむ云々

鸚哥は鸚鵡に似て嬰兒が母の語を學ぶが如し。故に字嬰母によるなり種類おほし

○鑑爐之圖 豎 七尺余 横 六尺余

客人社組入の外奥向に掲ぐ

文化六年己巳正月吉日 藍江中直寫

藍江姓は中井。名は。直字は。子養浪花の人

唐玄宗皇帝ある年。盧の病を煩ひ臥たふとまきの夢に云々皇帝夢覺て疾癒。則ち吳道士に命じて其圖を寫さしめ天下に傳へしとなり

○吳工女 應震畫 ○陵王 梅華齋

○虎之圖 豎 五尺 横 三尺

客人社廻廊 左に掲ぐ

池專定は京師六角堂池坊四十四世の正胤なり。字養道瓶隱軒と號し。又瓢菴とも云代々插花を以て聞へたり。傍丹青の道をも好めり。文政六年の夏此國にあそびし折自ら畫きて奉れり

○白鹿 春水畫 ○曹操 海山畫

○鯉 探幽畫 狩野探幽は初め采女と稱す。守信の事なり。孝信の長子にして。丹青の妙世の知る所。壽七十三歲延寶年中に没す

○山水之圖 抱一畫 ○靜觀 高時書

○松 光孚畫



○韓信出人之勝下之圖 豎五尺 横三尺

廻廊御作事所の前に掲ぐ 絹地形色

年號月日圖中になし。觀山の畫。通稱松

本觀山。浪花の人なり

史記淮陰侯列傳に淮陰屠中の少年の韓信を侮者ありて云。若長大好で刀劍を佩と雖も中情怯のみ。衆これを辱て云信よく死せば我を刺せ死すこと能すば我勝下に出よと。是に於て信これを熟々視て股をくさり勝下に出で匍匐す。市人皆信を笑ひ以て怯しとす。其後漢高祖に仕へて。大將軍となり。敵を亡し大功を立て楚王に封せられたり。後又淮陰侯となる。若き時より大功は細瑣を顧みざるの志ありしこと現はれて天下の人驚けるをぞ

○蝦夷人物之圖 武四郎畫

指渡シ 四尺余 深 六寸五分



願主 京都 廣島 人名畧之

○鷄之圖 應舉畫

丸山應舉は一派の畫法を起したる名家にして。内外人とも能知るところなり

○杯一器 神馬之圖 指渡し四尺餘 深六寸五分

本社廻廊東中央南向に掲ぐ 天明四春三月吉日繪給師京都細野仙助

明治廿六年北米「シカゴ」に於てユニオンボス世界大博覽會開會のとき出品したるに外人の高評を得たりと杯盃杯みな同じ。本朝の杯のはじめは。瓦器を用ふ。城州深草より出るを良とす。河州龍目是に次。日本記に神武天皇の香久山の埴土を取て平瓮を造り以て神祇を祭り玉ふとあり。今猶神酒婚儀の嘉祝に瓦器を用ふれども破れ易きをいとて尋常に木杯を用ふ。多く朱塗にして描金撤金等。甚だ美なり。其大なるを。武藏野と名け小なるを織部と名づく。其余種類多し

或説に瓦器を用ひし故。酒土器と云り恐らくは非ならん飲食を盛物を和名つと云

高坏。食坏。酒杯皆同義なり

又土器は猿丸太夫が造り創め。桓武天皇遷都の古。隨以來り。京都北山に太夫の後裔今なほ土器を造り居れり然るを明治廿八年遷都紀念祭に付。東山大雅堂の門前に出で紀念の爲同器を賣其店甚雅致なりしが瓦器の説前後年代に大差あり何れか眞か

○朝比奈草摺引之圖 俊峯筆 俊峰名は信。字は山三牧齋と号す。後東都探信齋の門人となりて。守嗣と改む通稱山野啓二廣島の人なり

朝比奈三郎義秀は。和田小太郎義盛が三男なり。母は木曾義仲の妾。巴なり。巴は關

寺の合戦より後世鎮て右大將家へ召され。三浦大助が扱ひにて終に義盛が妻となり。朝比奈を生む
 曾我五郎時宗の事は後に記す
 建久四年和田義盛大磯の遊君虎が前にて。曾我十郎と益の論最中。五郎は十郎が居たる背後の障子を隔て。すはと云ば和田を討て捨んと窺けるに。朝比奈是を悟り。諺へ離せいで舞んと立上り五郎が前の障子を確と開けば五郎は二玉の如く立居たり。朝比奈舞に執成客人此方へ入らせ玉へと五郎が草摺をひすと引。五郎は引れんと身をかけた

恭惟
 示杵島姬命
 神醒

靈蹤益壯哉
 廟克魏魏浮
 海氷

怪看屋氣住

樓臺

月

て動かす三郎方に任せて引けるに。草摺はらくと切て三郎と倒る。人々笑を催し是へくと請すれば辭退は無禮と坐敷へ通り。暫酒宴の後互に再會を期し立別しとぞ
 ○石川丈山之書 本社組入東向に掲ぐ
 寛永丙子春丈山自彫刻して此所に掲ぐ
 石川氏名は重之。字は四。号は四匹と云又

六ヶ山人。願仙鳥嶺子。大拙山材。山木藪里翁。東溪道人。三足老人。拙窩居士等。其書々々に記するあり。俗稱嘉右衛門左折衛に改む。參州碧海郡泉の郷に産る代々濱松麾下の士。其先源義家第六子左兵衛尉義時石川と稱せしより嗣で氏とす。寛文十二年壬子夏五月廿三日享年九十歳にして没す。因に云丈山初め惺富先生に道を學び。羅山子杏庵支同の遺と交りて詩を善し書を能す。京都一乘寺村詩仙堂に盤居す。此所に出すは額面の書のみ

○是蓬萊 敬幸畫

直實致盛之圖 豎 三尺余 横 二尺余 二枚金地彩色

天正五年十一月吉日備前國住人吉永。彦宥。丹覺畫
繪面の由縁は童子の輩も能く知るなれば此所に記さず

○厩馬之圖 豎 三尺 横 三尺五寸

本社大床の上に掲ぐ 畫工詳ならず

文祿二年六月吉日長嶺新左衛門尉盛兼 敬白

○廡 畫工詳ならず 豎 四尺余 横 三尺

慶長五年庚子五月吉日

廡は尾十二枚にして長さ五六寸能合せて疊ひとさは。圓黑白の重紋あり。尾の下に三品の毛あり。尾末毛と云。亂糸袂衣の下の尾と石打と云尾の端の白きもの杓華と云ふ背の毛を母衣毛と云其腋に出る白毛を芽花と云皆の脇の毛を齒黒付と云肘内の毛を水鬚毛と云脚に韋縵を着る所を毛なし脛と云種類多し日本匠の創めは仁徳帝四十三年秋九月なりと

○檀風之圖 豎 一間四尺 横 一間一尺 總金地極色

文化二年乙丑秋八月吉農藍江畫 畫系前に記す

資朝は權中納言從三位檢非違使別當後醍醐天皇の朝の人。日野俊光卿の三男なり。寃罪のため佐渡の國へ流され全國守護本間山城入道に斬首せらる子息阿新十三歳の時父の存命に見參んと佐渡に渡しが本間對面を許さずして斬首す。阿新夜に乗じ父の敵本三郎を伐ち館を逃れ出で湊へ來り船に乗ばやと浦邊の方へ行ける時山伏一人行合せ此兒を見て事の様子を聞き助けて便船を尋けるに大船順風に帆を揚げて走らんとす山伏聲を上げて叫びけれども船人耳にもせず漕出す山伏大に腹を立珠敷押揉で權現金剛童子天龍夜叉八大龍王其船戻し玉へやと祈りけるに。明王擁護やし玉ひけん。忽ち惡風起て船覆んとす。船人手を合せ。山伏の御坊助玉へと。船を漕戻し兒山伏諸とも屋形の内へ入れたれば忽惡風止て追風となる。扱あどより本間が追人馳來れども更に目もくれず終に其日の暮程に越後の府にぞ着にける。此圖を俗に檀風と云こど如何なる故にや。順逆の風を檀に起す以て名づけしものか

○松竹梅之圖 豎 九尺餘 横 二間余

安永六年夏吉且備煥誠通稱岡利源太。名は煥。字は君章民山と号す。松は百木の長として常盤木なり。竹は萬代をちぎるなり梅は年中衆花に先だちて咲き。其匂ひを貴ぶ故に花の兄と稱せらる。仁徳天皇の朝に百濟の博士。王仁の歌に浪華津に咲や此花冬こもり。

今を春べと咲やこのはな

此歌の此花を梅とこゝろして詠みたるやうに思ふは大なる誤なり。此花と云は櫻のことなり

○神馬之圖 豎 九尺 横 二間 金地彩色

年号月日煤びて見へず但し文の一字現はるゝのみ
狩野左近筆 左近は宗心種永が孫。種次と云り。永貞。探幽。主馬の三人を指南せし功によりて代々狩野氏を名乗ることを許さるとぞ。又永徳が二男貞信養浩と号し二十七歳にて没す。右近孝信が兄とも云り例れか

此神馬の畫は世に傳る所にて。或頃毎夜繪拔出で向ひ地に渡田畑を荒しと云々依て胸と足とに釘を打付られしかば終に出ざりしとぞ

因に云繪馬と云は。昔神馬を奉りしを後世畫て献する事とはなりたり。又繪馬に兵士花鳥など様々に畫き奉ることは余程後の世の事にや。當社數千の繪馬の中。古畫あまた見へたれども年次の然と見るは永正。天文より古きものなし

○三福神之圖 豎 九尺余 横 二間余

元祿十五年壬午正月元日常信畫 常信は養朴と号し右京と稱す又耕寛齋。青白齋の号あり。又古川と稱す主馬尙信の嗣。一時の名手正徳中七十八歳にして没す

○龍之圖 豎 九尺 横 五尺

文政十年亥十一月吉日伊川院法印藤原榮信筆
本草綱目に云龍の形に九似あり。頭は蛇に似て角は鹿に似たり。眼は鬼に似て耳は牛に似たり。項は蛇に似て腹は蜃に似たり。鱗は鯉に似て瓜は鷹に似たり。掌は虎に似たるなり背に八十一の鱗あり九々の陽數を具ふ云々

○寶船之圖 豎 二尺五寸 横 三尺五寸

天明四年正月吉日 畫工不詳

世に寶船と云い紀事に云。節分の夜船を白紙に貼て諸臣に賜ふ地下の良賤も亦畫船を以て臥榻の被の底に布て寐る今夜吉夢ある時は來歲福を得ると云。若し惡夢を見る時は翌朝流水に漬て惡夢を流すと云う。居家必用に云船に乘日月に入と夢る時は吉。船にして渡ると夢る時は大富貴を主ると云々

なかしよのどをのねふりのみなめさめ

なみのりふねのをどのよきかな 詠人不知

此歌は節分の夜の寶船をよみたる歌にて下からよみても同じことなり

船は崇神天皇十七年に勅して船を造らしむ

○神光照海 正一位三條實美公の書

○田植之圖 豎 九尺余 横 二間余

總金地極彩色 正徳癸巳九月穀旦狩野永叔筆



永叔名主信稱、右京法眼位に叙す。

初名敏信又明信と云永眞の孫。時信

が子なり時信早世に依て永眞に嗣ぐ

神功皇后。三韓を征し玉ひ御歸陣の時

長門の國より植女を召して五穀農業

の事を世に廣くし玉ふ。後世末流乳守

の遊女となる。又是に因て傾城今に早

乙女を勸む。攝州住吉神社御田植の神

事則ち是なり

○龍之圖 豎九尺 横二間 金地墨畫

文政元年戊寅九月稽首拜具。狩野大

藏卿法眼洞愛信畫○龍の解前に出す

○松間之日出 雅信畫 畫系不詳

○神馬之圖 豎一丈余 横二間余

金地彩色

寶曆十二年壬午歲二月日。法眼江阿彌畫

江阿稱名は卜信。夙に堂にのぼり大岡氏を冒し法眼位に叙す春卜門人なり ○神馬の解前に出す

○三十六歌仙 揚心書 畫系不知

○清正 元義の畫 畫系不知

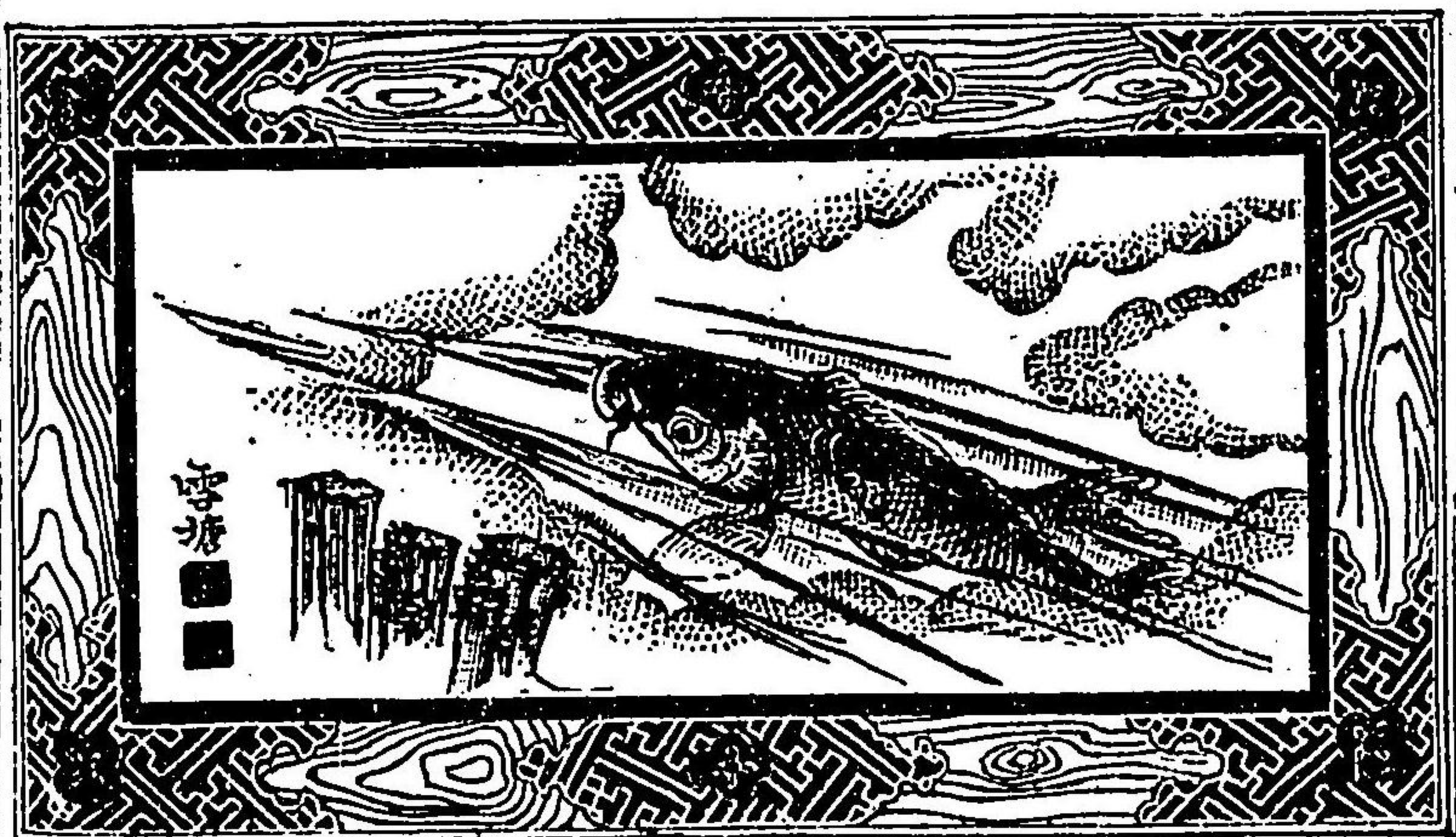
○六々魚之圖 豎五尺余 横二間余

金地墨畫 青金砂粉

文政十一年戊子七月吉日雪塘畫

山田野。字伯諧。一字。良平。號

豎五尺余 横二間余



雪塘又號墨耕其樓曰遠翠廣島の人

鯉は魚中の上とす。陰魚なるが故に六々の陰徴あつて其脇一道。頭より尾に至るまで三十六の鱗あり。鱗に十字の文理あり故に鯉と名く

○狂歌 貞佐 ○義家 有景

○馬之圖 畫工不詳

○橋辨慶之圖 豎 三尺余 横 三尺五寸

天文廿一年壬子三月吉日法眼元信筆

狩野元信は祐勢が子なり。幼名四郎二郎。後大炊介世に古法眼と稱す。其名唐土に震ふ。毎年正月二日末廣扇に畫て柳營に獻る永正年中足利家に仕へ永祿中歲八十四にて没す

此繪馬能世の人の知所にして元祿已前折々夜更て戰の音して翌朝是を見れば大刀長刀の彩色損じて神前に散ぐる事度々なり。社司驚て牛若辨慶の中を隔て草摺の額を掲ぐ。夫より止めど。是元信の筆妙感するに餘ありと云傳たり

牛若丸は左馬頭義朝が三男なり。母は大和源氏宇田左衛門尉が女。常盤の前なり。辨慶は紀州の住人岩田入道寂昌が子なり。仁平元年四月八日に誕生す。叡山の西塔櫻木坊の辨長僧都の弟子となり。常に力業太切打を好に依て鬼若丸とぞ異名しける。其頃西塔の北谷に武藏坊と云る空坊へ入て自剃髪し武藏坊辨慶とぞ名のりける。

○朝比奈草摺引之圖 豎 二尺五寸 横 三尺余

牛若辨慶の間に掲ぐ 畫工不詳

元祿八乙亥極月吉日 繪面の由縁は前に記す

○仙人園琴之圖 岸良の畫

○三十六歌仙 書は常雅公。畫は左光芳 右光惇

○耶馬溪之圖 皆雲の畫 ○鶏 松林の畫

○漁樵之圖 二承の畫 ○蝦蟇仙人 兆殿司畫

○神功皇后之圖 豎 六尺 横 三尺 金地彩色

關中關山法橋の畫 關山は後法眼に叙す。畫系不詳

皇后は人皇十五代仲哀天皇の御后應神天皇の御母君なり。人皇九代開化天皇の御曾孫氣長宿禰の王の御女。氣長足姫命なり

武内宿禰は景行天皇三年。屋主忍男武雄心の命。紀伊國に詣で阿備の柏原に居し。紀直の遠祖荒道彦の女影媛を娶り武内宿禰を生む。宿禰は日本大臣の創なり仁德天皇五十年に薨す景行。成務。仲哀。神功皇后。應神。仁德すべて六代の朝政をうけ行ひ玉へると御年

三百六十二歳云々

○福海壽山之額 豎五尺余 横二副半

豎横 五二 尺間 余半



享保戊申正月吉辰蒙所筆

蒙所は興氏名光 鐘字中連俗稱新興
文次進池侯の臣大阪に住す。其書唐

人に倣と雖も別に一家を爲す尤も篆書を能す

○日東第一勝 清人子琴鏡の書

○見持山姫之圖 豎七尺 横四尺余 絹地

豎七尺 横四尺余



天延四年三月廿一日。源

頼光 上洛の砌 相模國よ

り足柄山にさしかり。嶺

より向の嶺に逶迤し玉ふに

雲氣あり。頼光の玉ふは

彼所には定て人傑隠れ居

べしとて。渡邊の綱を召て

求めさせ玉ふに將て怪敷萱屋に老嫗一人二十計の童子と對居たり。綱是を求て太守の前に參らす太守姓名を問せ玉ふに。老嫗が曰く。天地の間に孕れて何れをか姓とせん。太守又の玉く童子は汝が子なるや父は誰なるぞ。老嫗が曰く我子にして父なし。妾は此山中に住事年久し一日寐たりし時夢に赤龍來て妾に通す。其時雷鳴影しくて夢覺たり。果して此子を孕む。生れて二十一年を經たりと。太守悦び玉ひ。是を得玉ふ。其名を坂田公時と賜りけり。時に治安元年七月廿四日頼光朝臣逝去し玉ふ。四天王は各々三月が間如在廟所寺の墳墓に參禮を盡して。三月滿參の時。廟所より三士に暇をして。行方知れず。各は數人を以て跡を追ひむるに伊豆の足柄山にて形を見失ひけりとぞ

○花紅葉之圖 光孚の畫 ○花瓶 逸峰の畫

○大印譜 桐香 ○神女 畫工不詳

○神廟記 士式 武林治庵の事

○菊童子之圖 豎 五尺 横 二尺余 絹地彩色

藍江の畫 年號月日圖中に見す

○道灌之圖 芳園の畫

○玄徳隨馬跳榎溪圖 堅 五尺 横 七尺

總金地極彩色

文化八年辛未十一月楠亭畫

楠亭は西村豫章字士風平安の人なり

玄徳は照烈皇帝姓劉。名備。字玄徳涿郡の人なり後漢の獻帝。建安二年に豫州の牧

となる。同十三年。左將軍となる。二十四年庚子自立して關中王となる。此年漢亡明

年辛丑に帝と稱し章武と改元す

玄徳は常に母に孝を盡し。願を售り帯を織て家業とす。身の長七尺五寸左右手膝を過

○又關羽。張飛と三人桃園に義を結んで兄弟となり云々

○大哉 協書 ○外國濶江之圖 常春の畫

○虎之圖 堅 三尺余 横 五尺余 金地彩色

堅四尺余横三尺余

願手 森祖仙齋



取次竹本文太夫

虎は山獸の君なり。形狀
猫の如く。大さ黃牛に等
し。黑章釣爪鋸牙舌の大
さ掌の如し。倒に刺
鬚を生ず。硬尖にして。
夜見に光を放ち一目に物
を見る獵師候ふて是を射
るに光地に墜聲雷の如し
云々

○猿乘鹿之圖 堅四尺余

横 三尺余

年號月日圖中に見へず祖仙齋の畫

祖仙森氏守象。叔牙。靈明庵の號あり

天朋五年乙巳孟秋於嚴島旅館玉殿
齋東洋畫
畫系前に出す

浪花の人

○大湖石 老山 ○神馬の圖 荒

雄の畫

○誹諧の發句 蒼虬撰 ○福祿壽

公長の畫

以上記する所の扁額を見終て又客神社に至る

○客神社 祭神 五座

正哉吾勝々速日天忍穂耳命 天穗

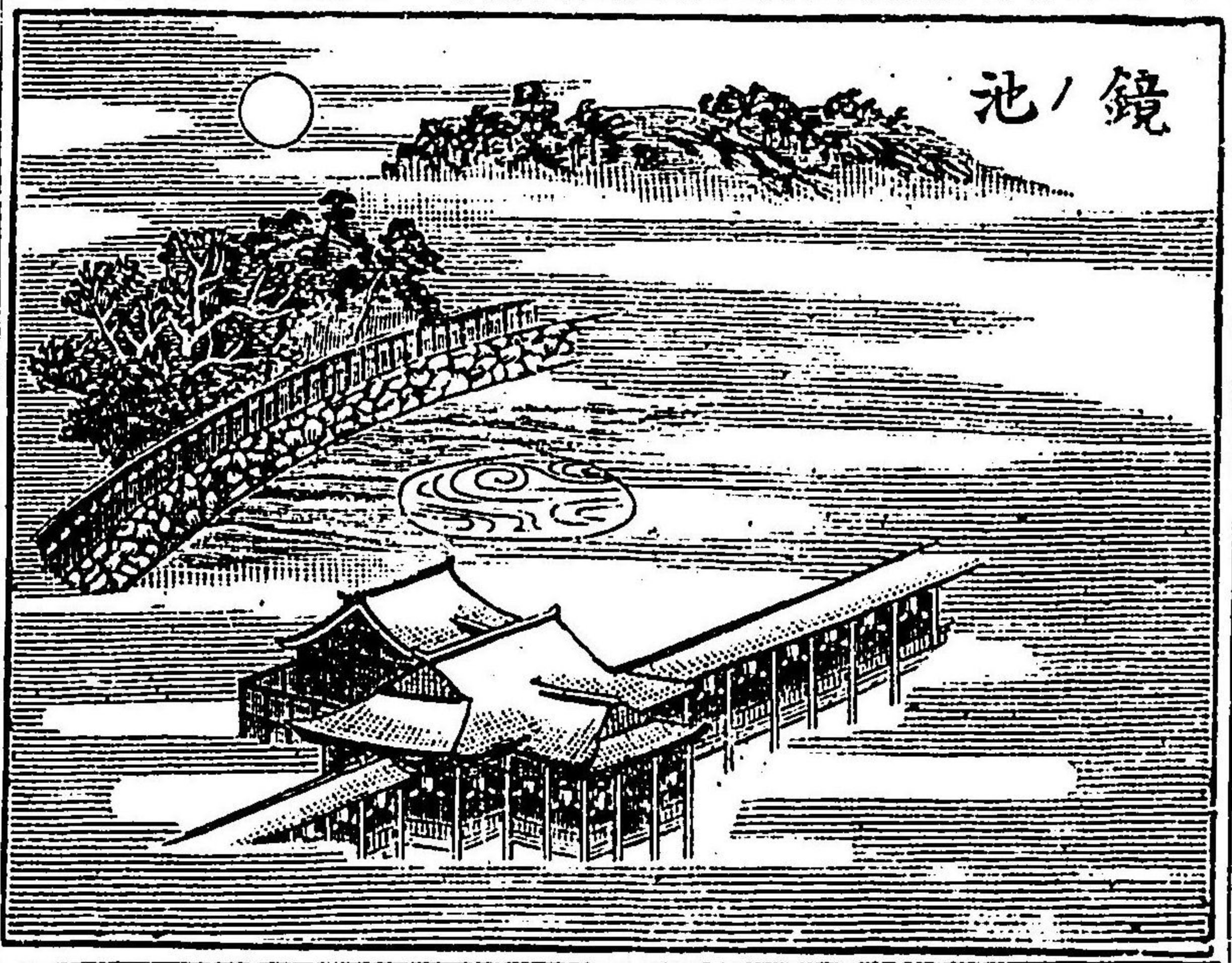
日命

天津彦根命 活津彦根命

樟日命

○本殿 梁 五間二尺三寸 桁 七間五尺五寸

鏡ノ池



○大床 幅 四尺六寸

○幣殿 梁 二間三尺五寸 桁 二間四尺七寸

○拜殿 梁 四間一尺八寸 桁 十三間二尺

○板殿 梁 五間一尺四寸 桁 五間三尺五寸

海原やまたも類はなみの上に

宮居しめたるいつくしまかな

○鏡の池は客神社のはどり玉の御池の潮退て後。丸く一小池をなし。一輪の月光をすま

しむ所を云なり

○鏡池 秋月 八景の一

みやしろにかくる光りも曇なき

かゝみの池にすめるつきかけ

海門靈跡甲西洲 殿島佳名千古悠

多少行人富觀賞 瑤池明月鏡池秋

○朝座屋清水 梁 五間一尺五寸 桁 十一間八寸

前權中納言 持 豊

宣阿

正一位藤原 宣通

本社と客神社との間にあり水清冷にして薬の水と云又潮退ぞきて直に汲用ゆるも潮の氣なく味甘し故に茶の湯の水に用ゆるもの多し

○神供所 朝座屋の内に設く。本社拜殿の傍に構ふ

○社務所 全上

○揚水橋 巾一間五尺 長三間

傍に平判官康頼。鬼界島にて故郷戀しさに。千本の卒塔婆を流せしが。其中の一本。流れ寄しと云石あり。今石燈籠一基は康頼歸京の後。寄附せしと甚雅致あり

○石燈籠之圖

寶珠高さ一尺八寸

笠石厚さ一尺

地上より寶珠まで高さ八尺四寸蓋石うづもれて見ゆす

軸廻り四尺長さ三尺五寸



おもひやれしはしと思ふ旅たにも
なほふるさとはこひしきものを

さつまたかた沖の小島にわれありと
親にはつけよ八重のしまかせ

康頼

全

○大國神社 大宮の左にあり 祭神 大國主命

○天神社 全殿の傍にあり 祭神 菅大神

○長橋 巾一間四尺八寸 長 十八間

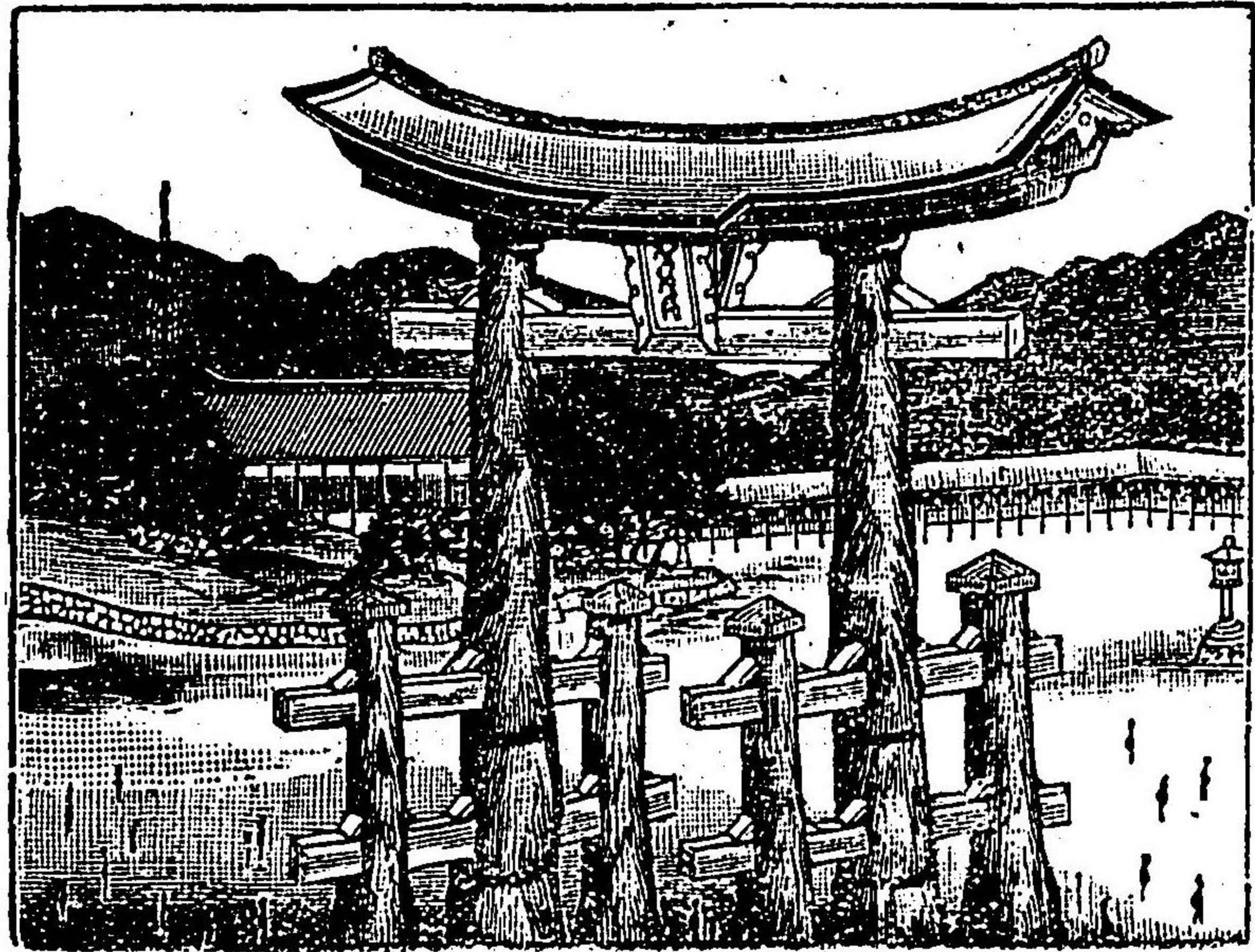
大宮と客神社との間にあり。平橋とも云ふ

○反橋 巾二間二尺 長 十一間三尺

大宮の左にあり。御池に架せり。又圓橋とも云ふ

○能舞臺 大宮の西南にあり。能興行の時は海面に棧敷を設くるなり

○行宮跡 能舞臺の近傍を云。高倉上皇御幸の時假行宮を此所に設けらせ玉入りと傳ふ



○玉御池 大鳥居の内。湖の到る涯を
 云。大神鎮座の昔此邊に玉を埋み
 玉より斯稱ふと云傳へり又玉は觀
 美の詞なりと云何れか

○石の玉垣 總周廻 百九十一間四尺
 大宮。客神社の外壇を云。玉の石垣
 は此岸上に建り

○大鳥居 柱高 七間二尺五寸
 圍 五間三尺三寸
 副柱高 四間四尺三寸
 圍 三間五寸
 棟 長 十二間一尺七寸
 上棟より軒先まで一間六寸

額庇 二間

左右距離 五間五尺八寸

總高 八間三尺七寸

火燈前を距る五十二丈八尺。本社の前より平沙に連り滿湖の時參詣の船帆を揚げ乍
 にして鳥居をくぐり來る。古より幾度も改造ありしが今建たるは明治七年十二月癸
 卯ありて。全八年七月棟上の式ありしものなり

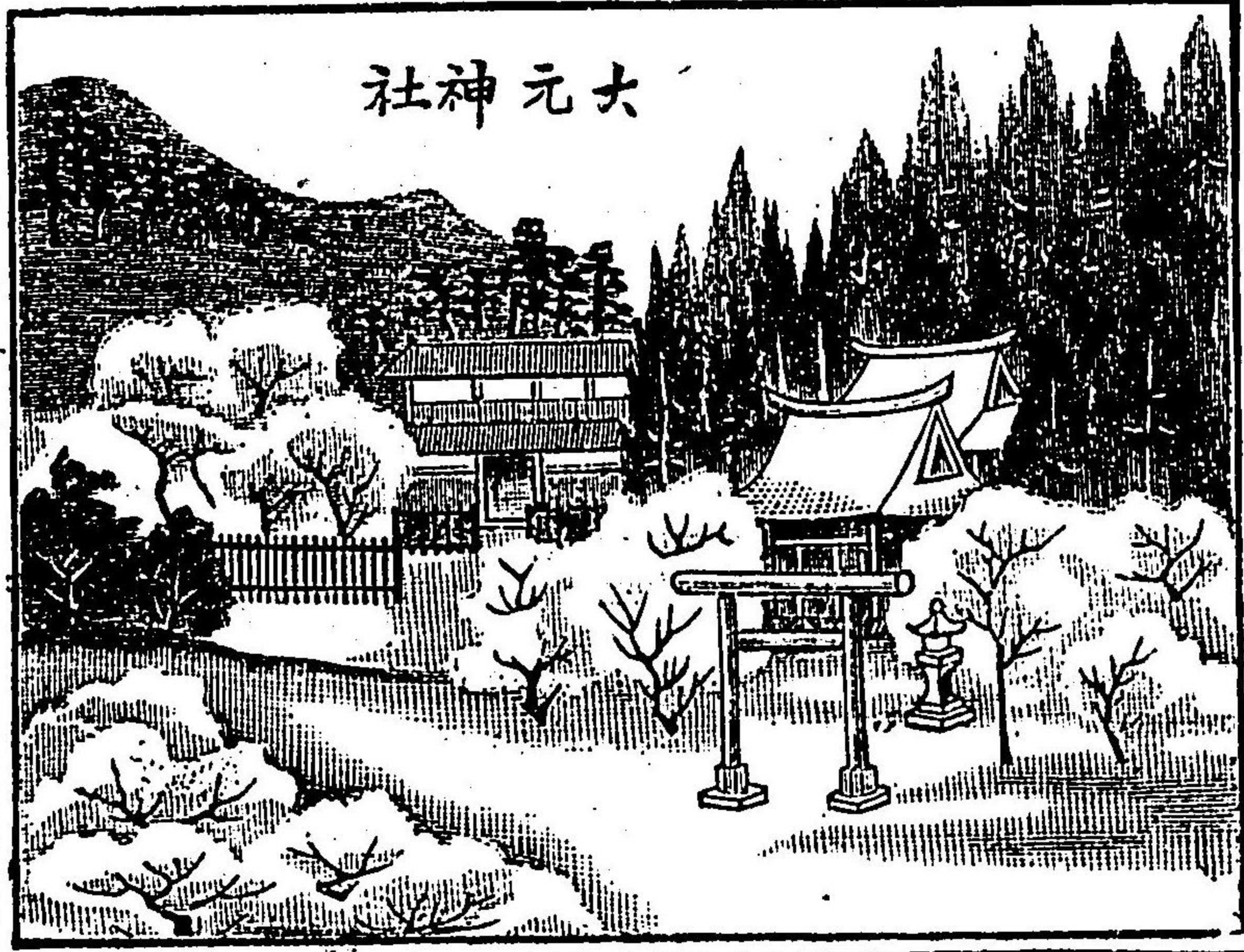
額堅 一間二尺三寸 横 一間二尺

有栖川二品熾仁親王殿下の御染筆なり

昔の額の由縁は。扁額の部に委しく記したり

○松原 玉の御池。御手洗川に沿て。長く連れり。數多の燈籠木の間に點々と
 して。社頭の光景を添るが如し

○大願寺 眞言宗にして。明治四年神佛混淆引分の時迄本社（大願寺）の修理造營一切を掌れり
 。庭内に小松内府重盛手植の松の古跡あり



○大元 此邊平原にして海に臨み。櫻樹數多あり。春花の頃の佳景は能く筆紙の盡す所にあらず

○大元櫻花 八景の一

大元の花のさかりになりにつり神のおどめも袖やふくるらん

忠秋

祖在仙山蒼波濱 白櫻相映滿階春
雲蒸霞散常彷彿 一段風流仰此神

韶光

○大元神社 祭神 國常立尊
大山祇命 保食命を祀る

大元浦にあり一月二十日百手の式を

行ふ

○寶山神社 清正の靈を祀るなり

○留守口恋比須神社 金刀比羅神社共に中西町にあり

○御手洗川 本社の後を流れ。筋違橋を架す。東に渡れば本殿の神庫あり。古代より奉納せし所の靈物を藏む其敷校學に逸あらず。又花園あり。本社西回廊の後を云ふ

櫻樹多し

手にむすぶみたらし川の月かげに

似雲

にこる心のちりものこらす

○御幸松 承安年中。後白河法皇御幸の時。此所に行宮を設け。松の本の御所と稱へ

させられしと云傳ふ

○御垣ヶ原 本社之裏手を云。明治四年までは觀音の原と稱へ本地堂のありし所なり

○此邊も櫻多し。全所に三翁神社あり。佐伯敬職。所の翁。岩本翁にて相殿は轉巳貴命。猿田彦大神。平相國清盛公を祀る

明治廿八年五月此御垣ケ原へ巨大ナル寶物箱ヲ建築シ階人
ヲシテ其寶物ヲ拜見セシム



漸しほにうかぶやかめの花の山

遊行

○千疊閣 本社右の岡上龜居山にあり

○天正十年。豊臣秀吉。朝鮮征伐凱旋の時。造られしものなり。梁廿五間桁十八間椽幅八尺欄干を四方に旋せり。眺望最もよろし中に豊國神社あり。豊太閤を祀る

○五層塔 應年十四年七月の建立と云

り。然ども何某の所建なるや詳ならず。方二間半。九輪まで高さ凡十丈。其後天文二年の頃に至り二百二十餘年を経て。殆んど廢頽に及ばん

たれもみな家路わすれて来てとみる

三かさのはまの雪の夕ぐれ

福羽美静

月のかげ花の光りもおよばじと

三かさの濱にふれる白雪

少年龜太郎

○三笠濱 本社の上より回廊北口龜居

山の麓の海邊を云ふ。此所。左は本社殿宇に連り。右は海に向ひ。遠く諸山を望みて雪の景色殊に清し

○有浦客船 八景の一

わが頼む神のめぐみの有の浦
ありし昔にかへれしらなみ

とせしに。

人々是を歎

き。再造せ

しかば壯觀

舊に復し今

に至て巍然

たり

○荒胡子社

龜居山の麓

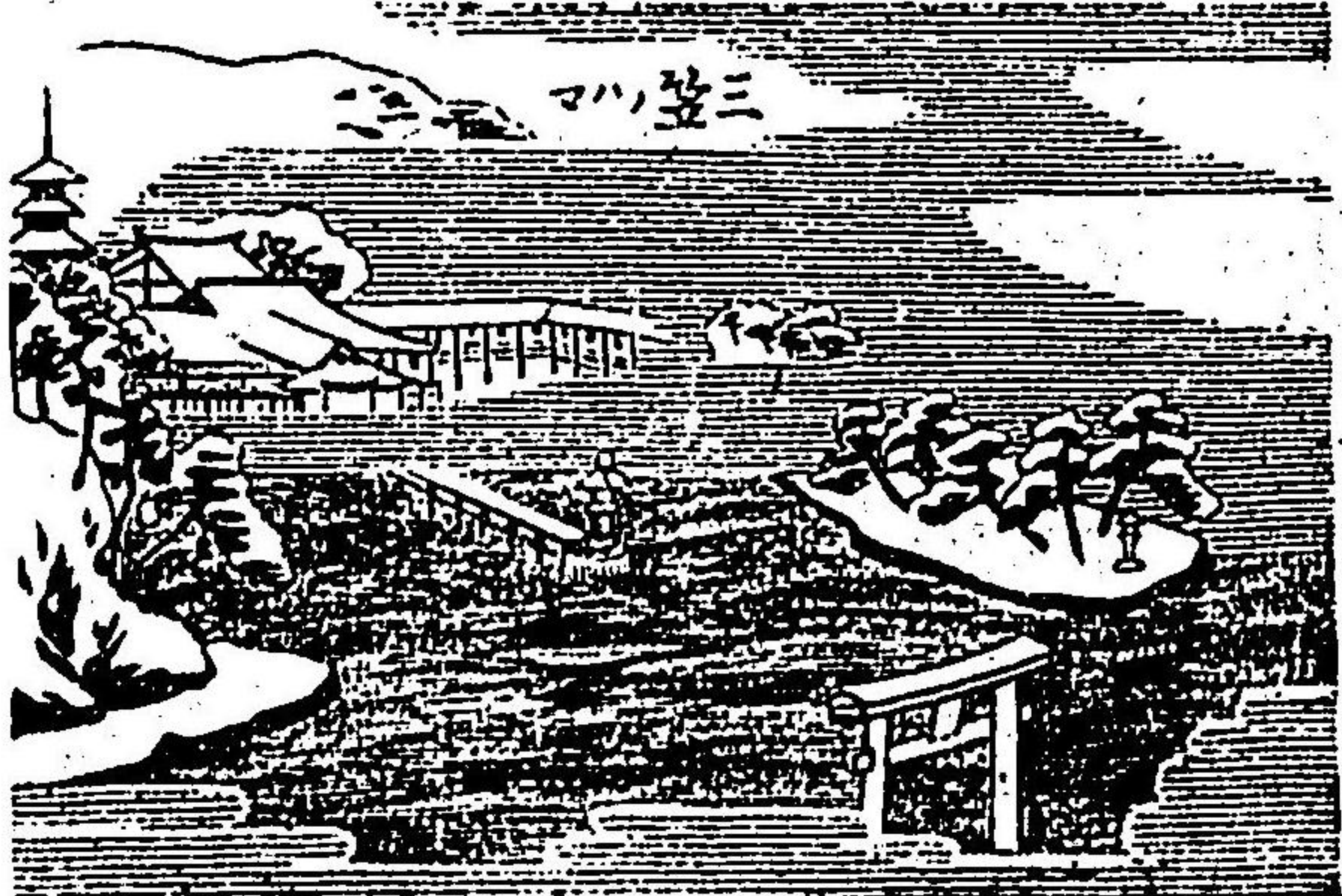
にあり。素

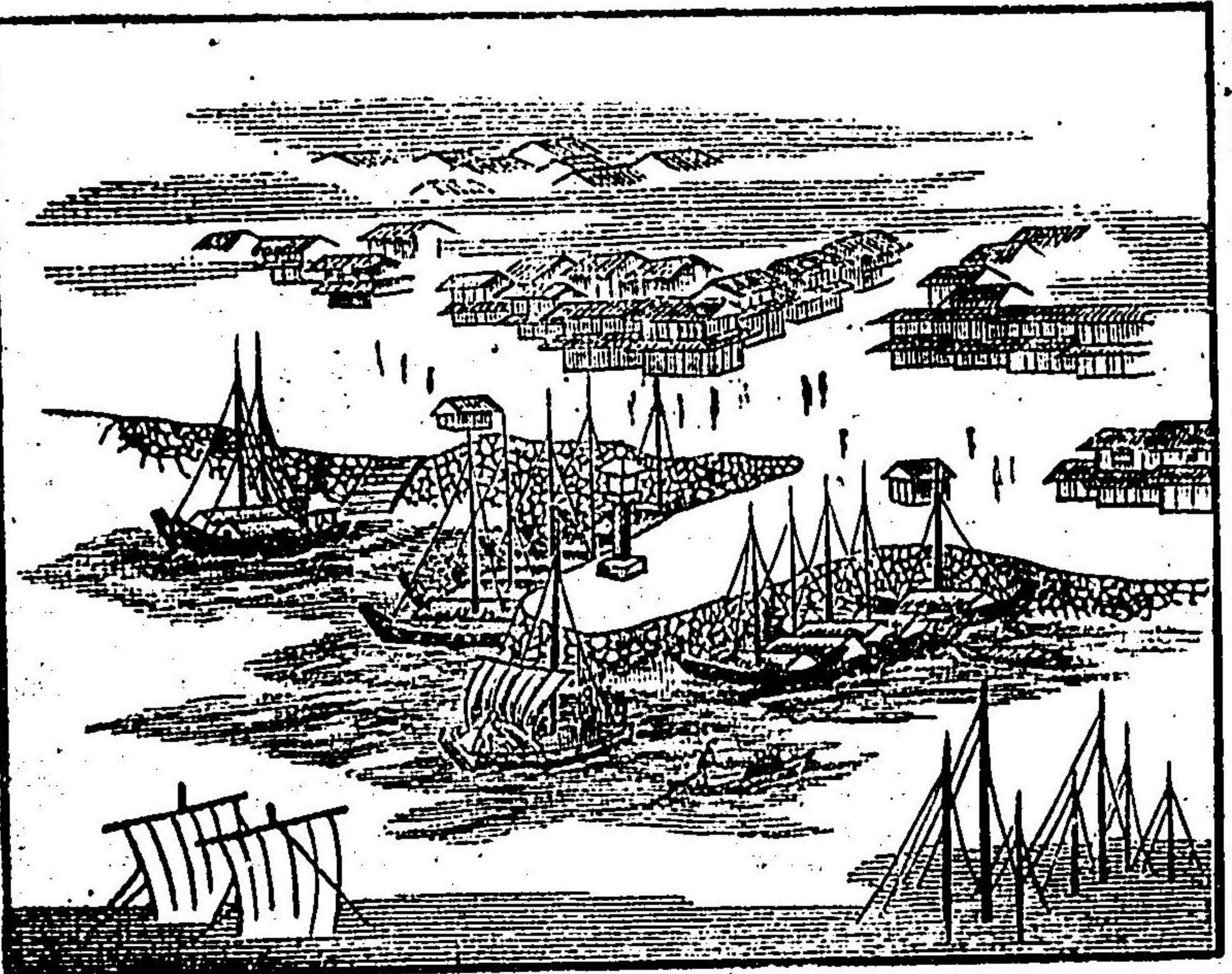
盞鳴命を祀る全所の文庫は本社

の書籍を

○三笠濱春雪

八景の一





義植公

つなきよる便や有の浦なみに
とまり定むるふねぞかすそふ

參議公長

激瀝波光有浦前 石磯一望水連天
無朝無暮問津路 去々來々幾客船

藤原爲經

○有の浦 平家物語。に磯浦とあり。
一島の要津にして賈船の來往間斷なし。
參客の迎送荷物の運輸常に賑はし。
蛭子神社あり事代主を祀る。又尼の州は壽永四年源平壇の浦の戦に。
二位尼安徳帝を抱き入水ありしが尼

の戸此所に漂着せしより即ち尼の洲と云傳ふ

○今伊勢神社

伊勢町の山上にあり。天照大神を祀る又存光寺は全所に在りて佐伯郡廿日市洞雲寺派の禪宗なり。此邊を宮の尾と稱へ或は要害の鼻と云有の浦の比端なり。弘治元年毛利元就。陶晴賢と合戦の時此地に陣屋を設られしと云ふ

○小浦

船子とも多く住める所なり。昔は詫しき家のみなりしが。今は立派に樓なども造りて賑へり又蛭子神社あり。事代主命を祀る



安藝國の一宮へ詣けるにたかどみの浦と云所にて風に吹留られ程経ければ。苦ふも
たる庵より月の洩けるを見て

浪の音と心にかけて明すかな

苦洩る月のかげを友とて

西行

○西行返

昔西行法師此所にて女に道を問たりしが其女態もせざりしかば「うつせ
みのもぬけのからにこそ問は山路をさへも教へざりけり。」女是を聞てうち笑み「も
ぬけのからかどこそ。よひづけれ既にもぬけのからならなれば何かは教へまわらす
へ」と云へり。西行答ふる詞なくして歸りぬ。依てかく名づけしとぞ

○長濱

一名八重濱とも云。長濱神社あり。興津彦神。沖津姫神を祀れり。此邊櫻
多く又海水浴場ありて風景最もよろし

○二王門跡

長濱より本町に越る道なり。往昔本宮の二王門なりと云なれど其證なし
此邊も櫻多し

○徳壽庵

存光寺の隠室なり。堂内に金石の地藏菩薩を安置す

○瀧の尾

山上に小瀑布あり。此所舊大佛原と云へり。釋迦の大像を安置しありしを
。近年今の名に改めたり。此邊も櫻多く櫻が茶屋と云る樓あり

○梅林

梅は近年植たるなれど。年々繁茂して花の頃は山風遠く蒸りて杖を曳く雅
客多し

○寶壽院

眞言宗にして京都仁和寺の派なり。開基は詳ならず。文安の頃。高野山
の學侶宥順上人天奏を経て堂宇を再建す。本尊彌陀如來は往古常島綱の浦海中よ
り漁夫の網にかゝりて上り玉ひしと云傳ふ。又唐畫の藥師は秀吉公征韓の時持歸り
て寄附せしものなり

○鳥居松

岡の上にあり松二本並び立て鳥居の如し依て名く此邊より瀧の宮へ越る山
路すべて櫻の林なる故に花時には遊客宴を開きて最賑はし

○殿島町

小字分れて濱の町。伊勢町。新町。西連町。魚の棚町。北の町。中の町。幸町。
大町。南町。中江町。瀧町。中西町。大西町等なり此内商家軒を連ぬるものは濱の町。
北の町濱通り中の町表裏并に幸町。大町。南町なり就中名物の色揚枝。枚子。木竹

益竹細工等をさぐり商店は幸町。大町。南町に最も多し。

○幸神社

幸町にあり猿田彦大神を祀る。此邊を金鳥居と云へり。長寛年中の建立と云ひ。又一段に足利氏此所に銅の鳥居を建んとし其功を竣ずして止みぬ何れか證を得ず昔は金鳥居の辻君とて遊女のありしも今は全くなし

○塔の岡

本町より本社に參る路にして。五層塔ある龜居山につゞく故此名あり此邊も楊枝店多し

○光明院

淨土宗京都智恩院の末寺なり。開基は天文の頃。以八袋中とて共に不凡の聖なりしが。袋中は檀王法輪寺を再興して。京都三條大橋東詰に住玉へり。以八上人は繁華の地を厭ひ當島に來り此寺を建たりと云

○谷ヶ原麋鹿 八景の一

なく鹿の聲は秋なるやつが原

おかべの松はとききはながらに

傳道原頭物色幽す 清風爽氣不因秋

風早 實積

嚴島紅葉谷勝景圖





數株松樹陰森處 且暮只看麋鹿遊

菅原 爲 範

○谷ヶ原 紅葉谷の右手を登れば。茫茫たる平原に續きて常に麋鹿の群をなす。木々の梢の紅葉する頃は一入愛すべし

因に云。鹿の名所は谷ヶ原と定められた。神垣の邊にも眠り。又市中に遊び能く旅客に馴るなど僧からぬさまなり。往昔より是を大神の召す獸なりと稱へて獵る事を禁じたり。神代にも鹿のかた骨を焼きて占柴し玉ふに。東西南北乾

長坤巽と現れたり。是を太麻邇の占業と云。此獸角あれと怨事なく其性穩順にして神も愛し玉ふなるべし

○秋葉神社 南町にあり。火産靈神を祀る

○紅葉谷 溪水清く潺々として奇石の上を奔り。兩岸に大樹の櫻あり。又楓樹多く。郭公を聞き岩を避け。月をながめ。雪を見る。四時の好景雅となく俗となく人の絶

問なき一區の勝地なり。近年殿島公園地となる

○四の宮 紅葉谷にあり。此邊秋の頃虫の音を聞。清閑にして最よろし

○御山詣での順次

○瀧町 御手洗川に架す。筋違橋を渡りて御山に登る道なり

○大聖院 御山の麓にあり。眞言宗にして大同元年の創立なりと云。當院は本社別當職にして。是を座主と稱す。康正文と二度に水火の災に罹り。舊記を失ひたれば。典故の照し見るべきなく故に寺傳も確かならず。又開基も詳ならず。然れども治承年中高倉帝御幸記に當職尊叔上人を阿闍梨になし玉ふとあり。天正年中伏

見貞敦親王の御子にて後奈良帝の御猶子なる仁助法親王斗數行脚の姿となり。西國下向の時此寺に留錫し玉ひぬ。是より京都仁和寺に屬せり。什寶巨勢金岡の畫きたる聖徳太子の御像に後京極攝政長經公の讀ありて世に珍らしき物なり。此外弘法大師の眞筆兩部陀羅尼五尊。六字名號。合體不動。愛染又全大師の御影は眞如親王の御筆。豊太閤當院にて和歌の御會ありし時の三十六首の一等軸を秘藏せり。世に有名の古刹なりしが明治廿年十二月十日火災の爲其遺跡を滅し只一片の名殘を止むのみ

○一の鳥居 御山に登る麓の道にあり

○祈不動堂 豊臣秀吉征韓の後此所に藏めし護身佛なりと云ふ

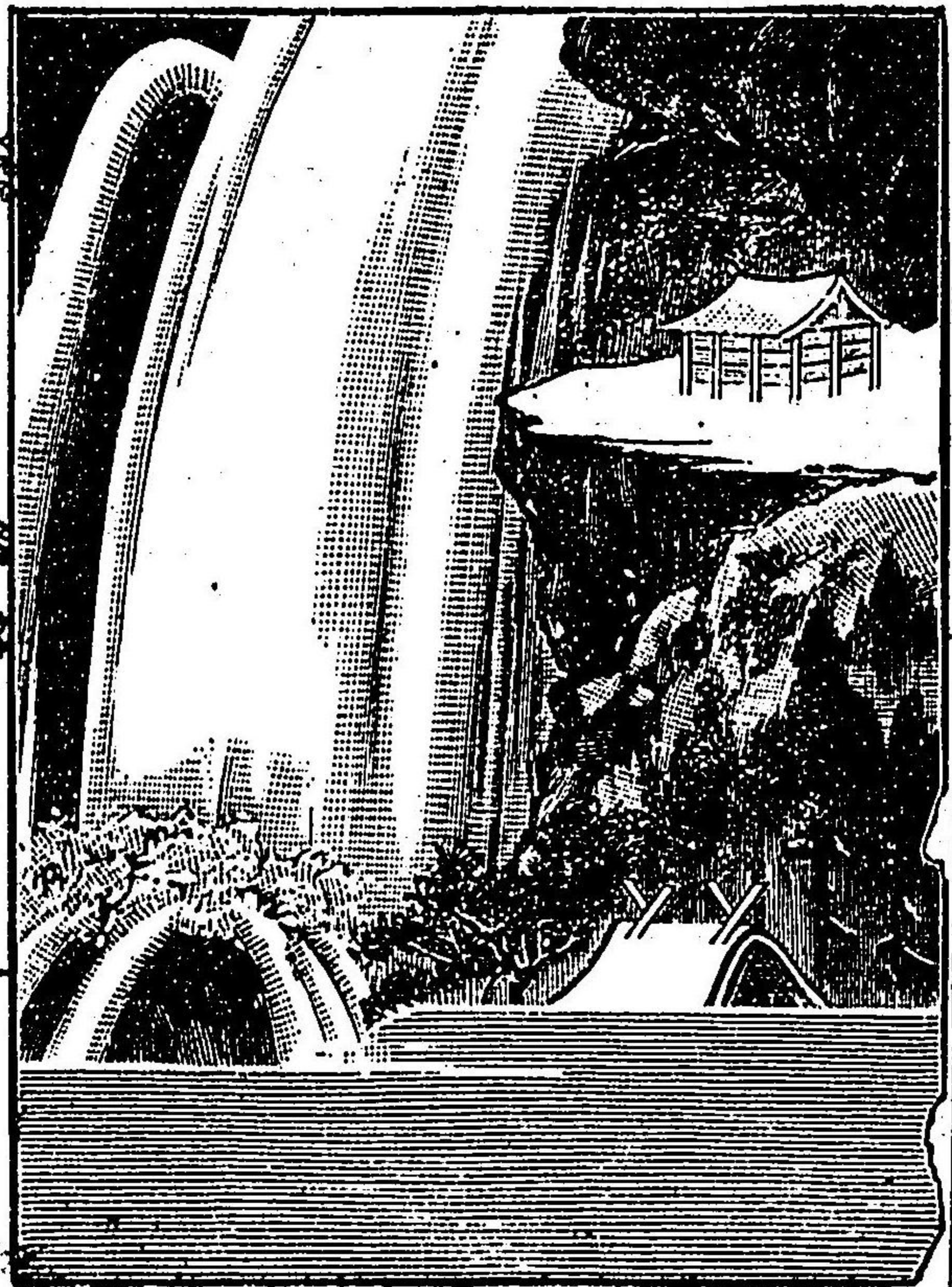
○瀧宮 一の鳥居より一丁餘にあり。湍津姫命を祀るなりと云ふ

○瀧宮水蛭 八景の一

山高みおちくる瀧のしら糸は

雲にみだるゝ玉かどぞ見る

藤原清正



雲井よりおちくる瀧の宮のべに
 はしどなかれてとふはたる哉 忠敏
 森々緑樹遶宮邊 南岳懸雲吐立泉
 萬點水螢三伏夕 涼風亂影似秋天

時。此石の上に御輿を据させ玉ひて
 白糸の瀧を觀覽ありしと云ふ
 ○中堂 參詣人此所にて休憩す。一

藤原總長

○白糸瀧 瀧宮の山上
 に在て水勢はげしく
 落くるさまながら
 白糸を亂すが如し。
 ○此邊螢多く水に映
 じて最すいし

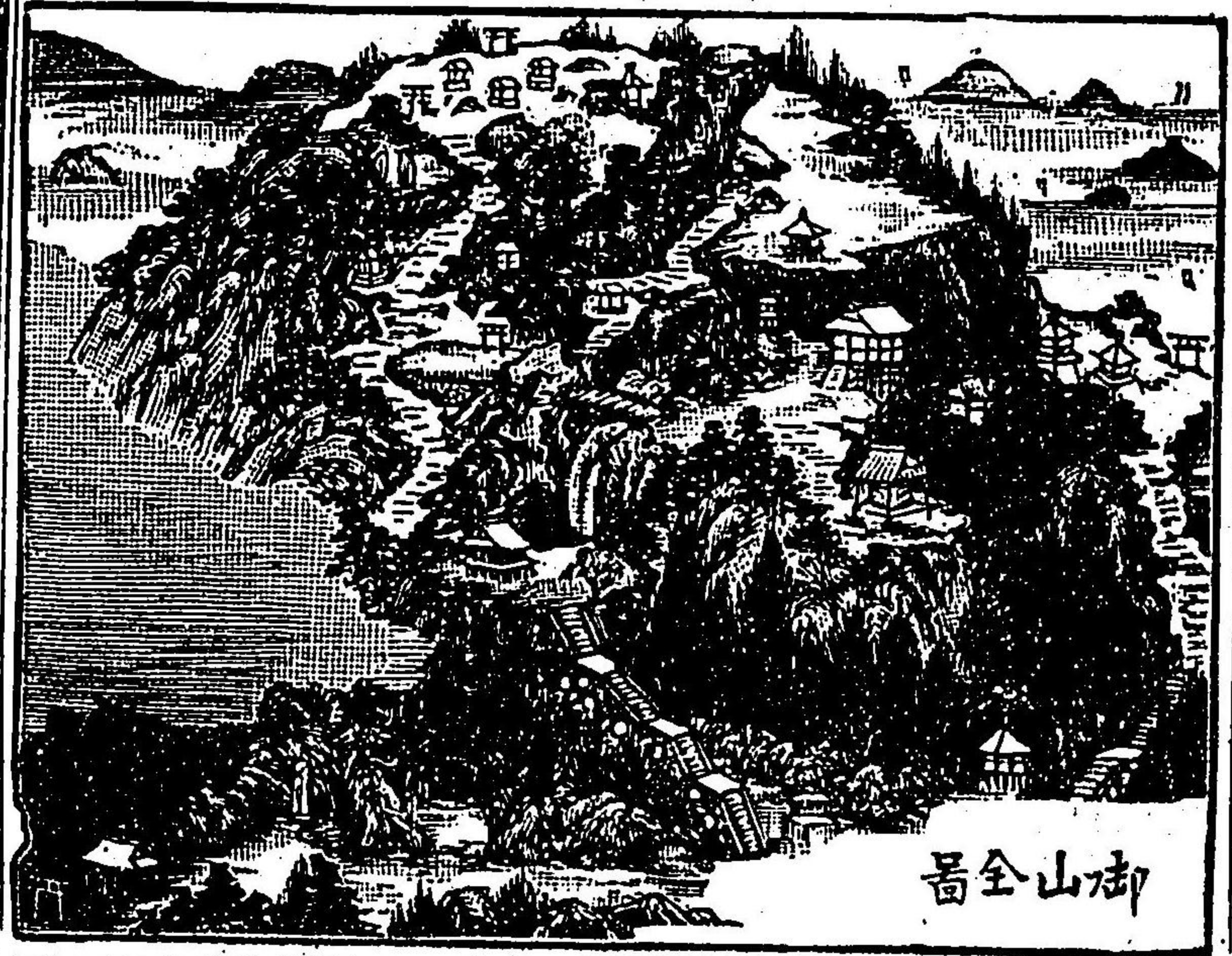
○御幸石 瀧前の平か
 なる石なり。治承四
 年高倉上皇御幸の
 時。此石の上に御輿を据させ玉ひて
 白糸の瀧を觀覽ありしと云ふ

の鳥居より七丁餘名物力餅あり味ひ
 甚よろし

○幕岩 御山の平腹に聳て千仞の巖
 壁恰も幕を張たるが如し又奇と云つ
 べし

○力石 名義詳ならず。里邸に云
 。福島左衛門太夫正則登山の時。此
 石の邊にて怪異の事ありしかは。直
 に下山せられき。依て太夫戻しの石
 とも云り。是非は未だ詳ならず
 ○二の鳥居 一の鳥居より十五丁の所
 にあり

○二王門 古は此門より上を彌山の本



御山全圖

山と云て未刻より登山を許さざりしが明治四年の改革より今は此禁なし依て自由に登山する事となりたり

○水昌石 大さ一丈餘の大石にして。中央に穴あり是より内部を覗き見れば石中悉く水晶なりと云ふ

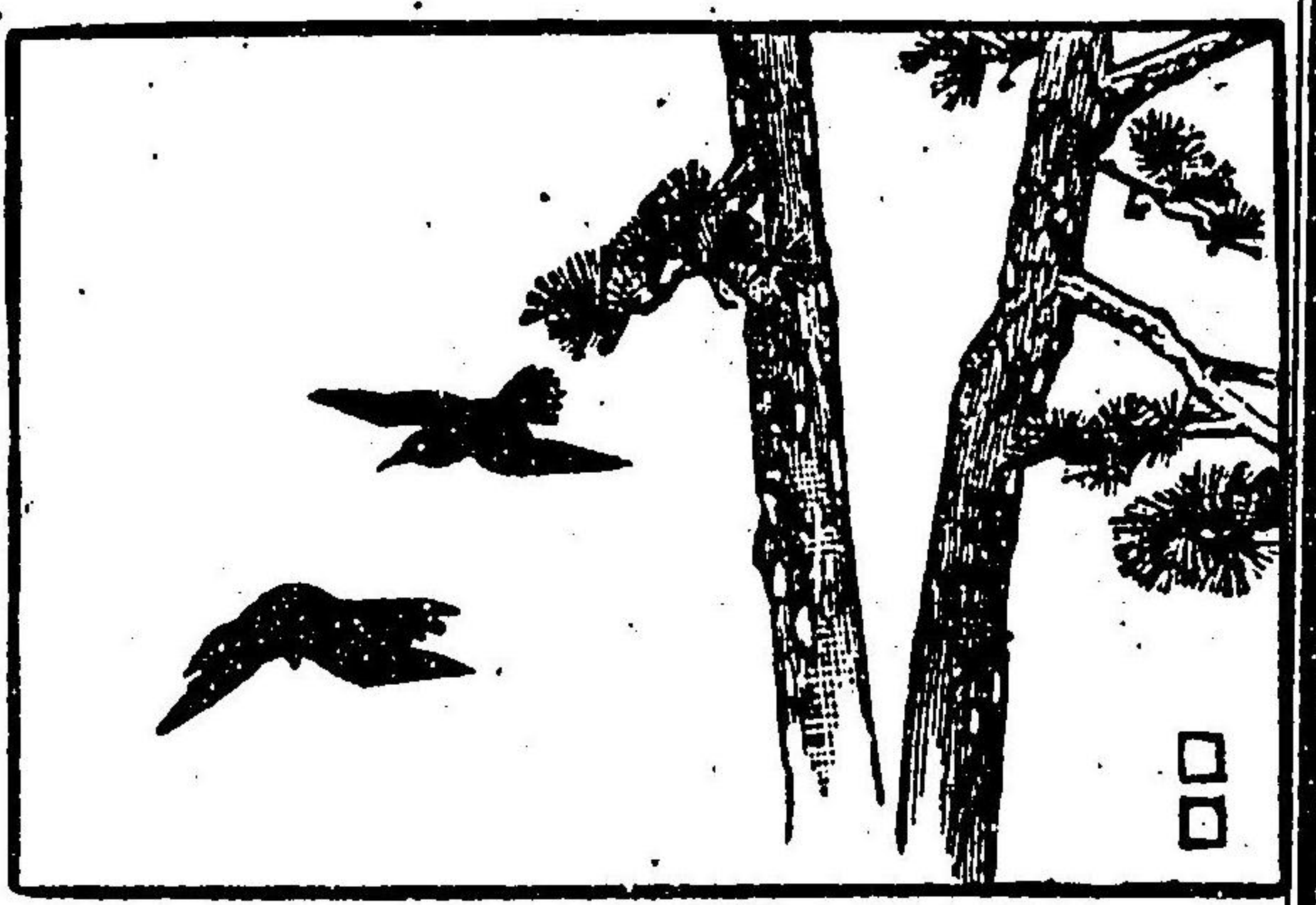
○御山神社 一の鳥居より登路十八丁の所なり。市杵姫命。田心姫命。湍津姫命。の三柱を鎮め祀りし舊跡なりしも。何時の頃よりか。追長鬼神。魔羅鬼神。時眉鬼神を合せ祀て。大神の御名を稱ふる者なかりしが。明治四年改革の時より舊に復し

て。斯く祭る事とはなりたり

○抑も當御山は。高野山弘法大師の開基なり

○大師。姓は佐伯。名は空海。弘法は其謚なり

○讃州多度津の人。年長じて深く佛法に歸依せり。今明治十九年を去一千百二十



八年前。桓武天皇の御宇。延暦廿三年異域に渡り大同元年歸朝して。偏く靈地を求め玉ふに。此地靈場なりとて梵閣を造立し。山勢の突兀なるを以て須彌に表し彌山と號け玉へりと。又一説に御山の義にて明神のおはします山なるを以て斯く稱へしを。佛場を開きて後彌の字に替たりと云り。何れにしても明治四年の改革より舊の御山と稱ふるなり

○御山神鳥 八景の一

この山の宮居をさらして幾とせか

すめるからすのつかひはなれぬ

中納言輝元

登彌山率記所見古詩三十韻

石川丈山

殿島蒼溪上。彌山素雲邊。廟貌壓垠堦。濛濛溢穹天。

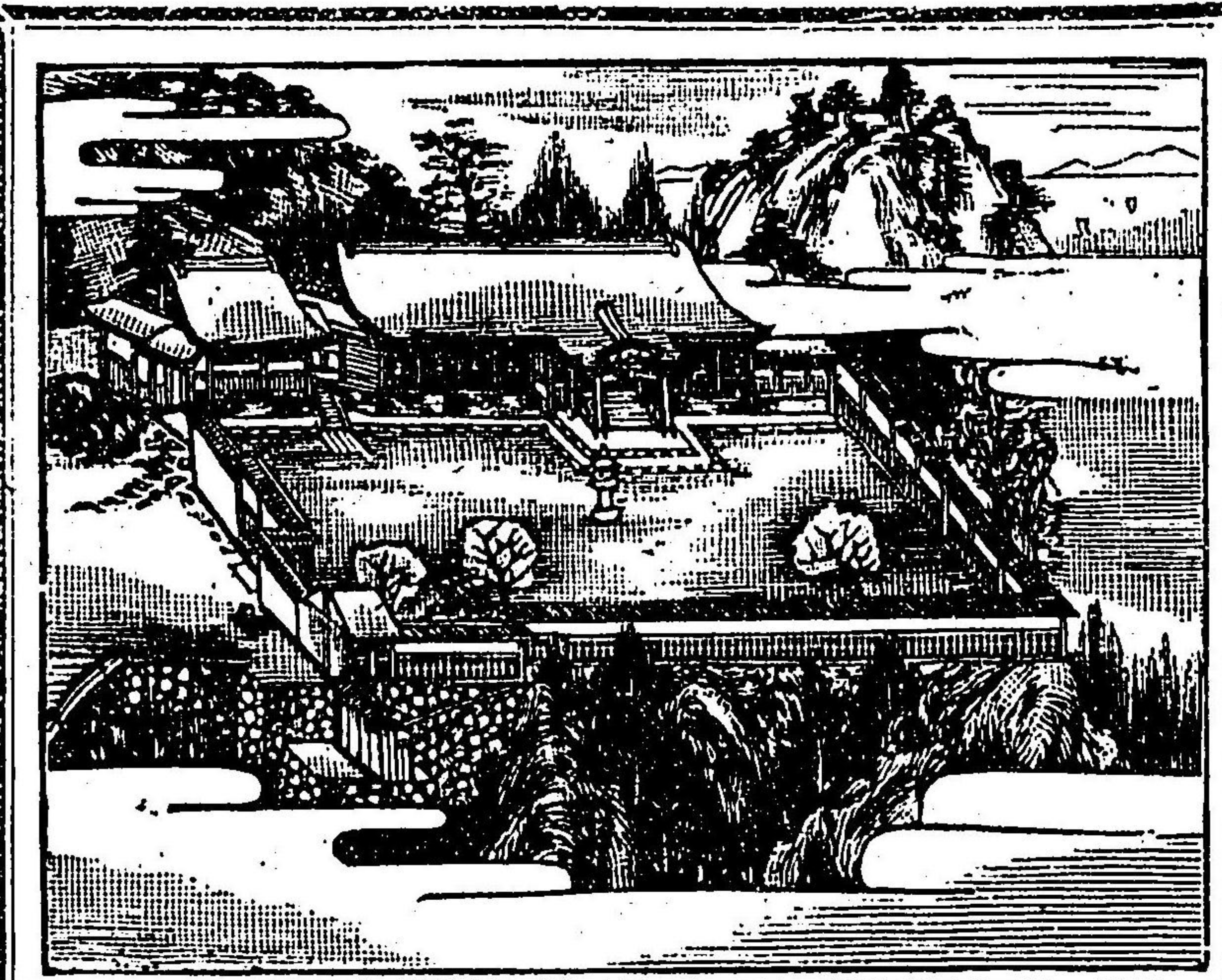
伊昔蓬瀛地。縹渺棲神仙。應眞飛錫翁。安期賣藥還。

谿衍坤軸斷。崆峒日輪旋。渙汗穠樹陰。祖禱盃飛泉。

旁磚無人境。登臨意惘然。芝草醉玄解。松子飽僊佳。

巨石競怪狀。遠容愕屯。選浮景接。崑閭層陰。延虞淵。回顧踞壘。登跼步。凌絕嶺。俛仰忘身世。騁懷獨踞。蹻。烟魅時出沒。蝙蝠盡飄。歸墟千仞谷。弱水萬里船。對西青經緯。巨束翠微連。白鳥有雌雄。振古不知年。双飛巢壽域。幾度見桑田。日嬰尊如在。市杵姬所躐。二聖三千載。小祠八九椽。空海据神區。遺求聞持傳。蒲罕吼狗。麓華表時。爾汗。猿叫煙霧裡。鹿臥殿堂前。木客姑獲鳥。化鬼又變。鷲。丘僧誓被害。群民懼為。嗟非有道骨。曠能久稽。旃多病訪。負局。修生問。稚川。高蹈嘯巖曲。薄言避塵緣。早洗。許由耳。將拍。洪涯肩。茲游重難繼。舟懷聊欲宣。讀者可。燭。咲。信。筆記一篇。

○神鴉 形細くして普通の鳥と異なり。抑も此神鴉の始祖と云は。三柱の神宮島へ御鎮座の往古より雌雄の一双年々相續せり。舊曆九月廿八日に殿島の海向ひ地大野



村大頭神社の神前半丁餘隔たる御田中に於て親子四鳥の別をなし。後親鳥一双方知れずとなる。然るに。慶應二年此邊戰場となりし爲。一年別鴉の式を怠りしより。爾來雌雄二双となれり。然れど二双の外は更に殖増する事なし。

○求聞持堂 梁十二間桁二十五間。本尊虚空藏は弘法大師の御自作なり。此堂は大師求聞持修法滿座の靈場にして開持の火は一千有餘年の往昔より今に傳れり。長享元年に再興ありしを。慶長年中福島正則又脩營せら

れしと云ふ

○岡伽井 堂の後の岩下にある。大師修法の時の加持水にして今に清冽なりとぞ

○尋陀羅石 求聞持堂の下なり。數十丈の磐石にして石面平なり。大師石面に三世諸

佛。天照太神宮。正八幡三千七百餘座の字を鐫り玉へり

○時雨櫻 堂前にあり。花しげく露深くして小嵐吹ときは白露ちりて。時雨かど疑は

る因て此名あり

○玉取岩 同所にあり。昔し此石面にて瑛玉を取たりと云ふ痕あり

○鐘撞堂 巨鐘を懸たり。治承元年右大將平宗盛の寄附する所なり

○毘沙門堂 同所にあり。方三間五尺。堂中の額に「寫彌山佳景」と題す。士式の撰

なり。士式は支那抗州武林郡の人にて孟子の裔なり。明末の頃我日本に歸化して

武林治庵と稱せり。赤穂義士の一人武林唯七は則ち治庵四世の孫なり

○頂上石 御山の絶頂なり。高さ三丈周圍四丈あり 數百年を経たる大木なり、近年大方は枯て僅かに枝葉の青さを存するのみ

○龍燈杉

。此所は海上に浮ぶ龍燈を拜するが故に名づく。龍燈とは舊正月元日の夜より三日
又は六日大宮の沖に現るゝ火を云。初め一燈浮び出。須臾して六七燈より三十五十
の多さに至り後混じて又大の一燈となる。火色常の燈火に異ならず。毎年此夜遠近
の老若男女毘沙門堂に參籠し此杉の本にて龍燈を拜す。昔は前に述べたる如く未の刻
より御山に登ることを禁じられたれど。本夜に限り怪異の事あらざるが例なるが故に別に
あやしむ者なし。實に奇靈と謂つべし

○船石 其形ち船に似たるを以て名たり

○大日堂 大同元年弘法大師。唐より歸朝の時。此島に渡り。眞言秘密の道場として

建立せられたりと云。堂中に木造の燈籠あり余程古代の物なり

○奥の院 大師堂及び彌勒堂等あり

○龍馬場 岩の上に馬蹄の跡あり。駒ヶ林と云ふ。弘中隆包。毛利元就と戦ひ敗死せ

し所なり。駒ヶ林は駒返しの誤りなりと云ふ

○三劍窟 龍が馬場に至る路にあり。昔三段に折し御劍を納めし所なり

○龜ヶ窟 普龍の出しと云ふ巖穴あり其
深さ知るべからず



○護摩谷 護摩谷の窟と云ふ磐石覆ひかゝ
りて一室の如し。弘法大師護摩修法あり
し所なり。内に大師の像を安置す。此所
より二玉門に出元の道に歸る。又谷路つ

たひに踏鞴島に出る道あり

○島巡り

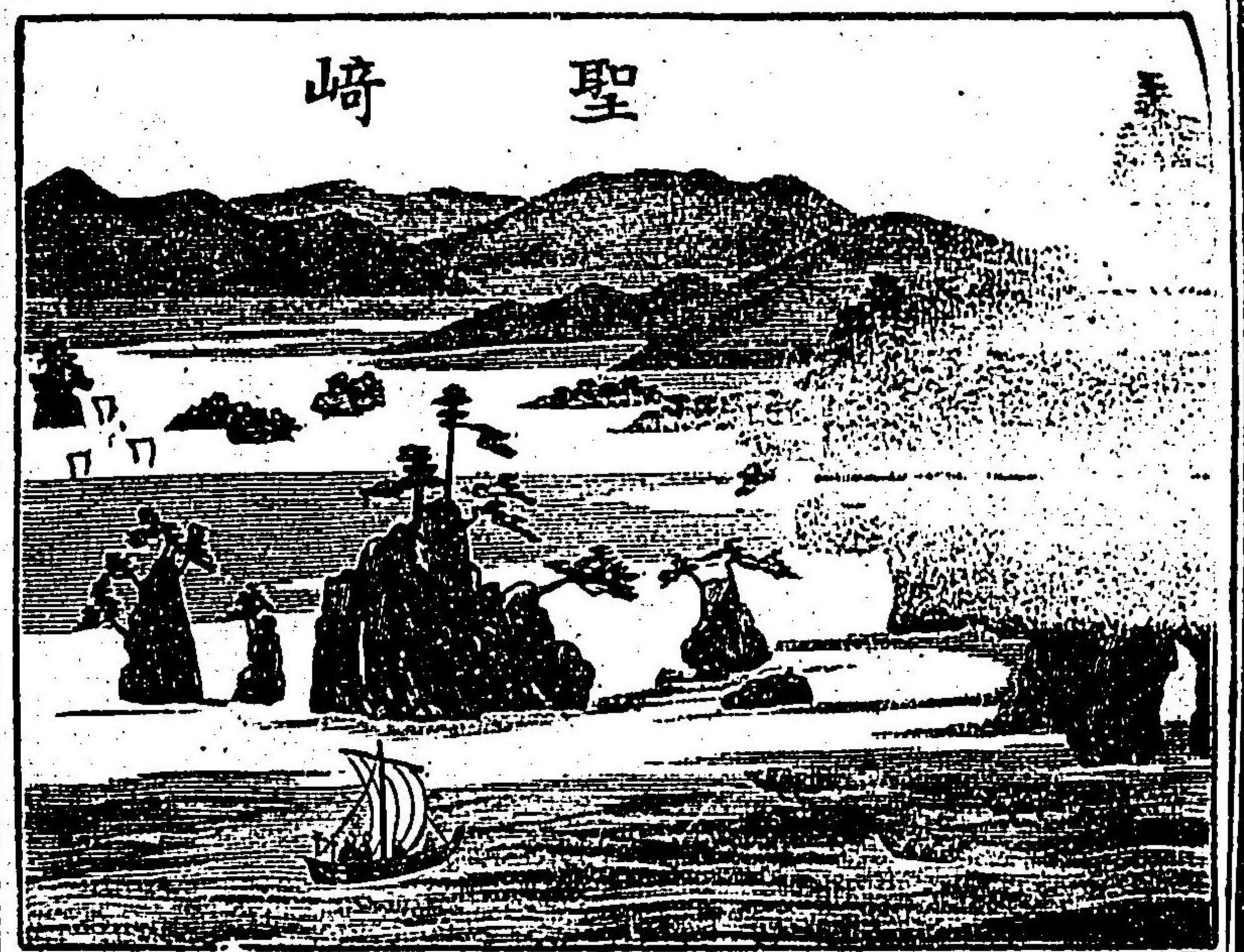
抑も此島巡りは。大神御饗座の初め。
大官所の地をみとなはしめんとて。佐
伯族職。所の翁等。神鴉の先導に隨ひ
て浦々を巡り玉ひし縁のもとなり。此
例にならひ。願主吉辰を撰み社務所に
島巡りの事を依頼し。當日未明より各
々腰板して船に乗り。順次七浦の神
社を拜すなり。是を島巡りの式とせ今
尙傳はれり

○聖崎 島の北端にあり。風景絶佳
是より東を島の裡とす

○蓬萊巖 聖崎の海上にあり。巖上の
古樹頗る奇景。其形世に畫ける蓬萊
山にハレに似に名づく

○海氣 四五月の頃。風しつか波を
だやかなるの日。蓬萊巖の沖一面
へ海氣發して。中に宮殿樓閣樹木等
の變象現れ。次第に消散す。是所謂
歴氣樓の類なるが未だ其理を究めた
るを聞ず。古説に此邊の海底みな沙
金なる故金氣の發するものなりと云
ふ。又近説には海草の氣蒸發して。
廣島城の景色或は社頭の反射するも
のなりと云ふ

聖 崎





いく世をかすきの浦風ふく音も
神さびにけるこの宮居かな

中納言持豊

○杉の浦神社

底津少童命を祀る。島

巡り第一の拜所なり。此所にて神官
祝詞竟りて樂を奏し。願主各々拜す

「以下七浦の拜式何れも同じ」拜終

りて朝餉の式あり。甚古風を存す

○金岡水

杉の浦の二丁奥にあり。此

水清潔にして甘味あり。地勢海に近

けれと鹹氣少しもなし。佐伯郡廿日

市彌生寺の金剛和尚。此所にて座禪

専らし事あり。餘て名づくべからず



○包の浦神社

七浦の外なり。搦土翁

を祀る。島巡りの時船より拜す。

本社祭神は太古神武天皇天下を平

定し玉ひしとさ。帷幕の軍議に参り

し翁なり。此神義をたすけて非道を

誅し玉ふと。因て弘治元年毛利元就

陶晴賢を伐し時。此浦より上陸し

終に勝利を得られしかば。後社殿

を改造し社額若干を附られしとぞ



○鷹巢浦神社 島巡り第二の拜所。底
 つつ男命を祀る

常盤木のかげもたかすの浦波を

かけてはれたる神のひろまへ

中納言持豊

かげしめてひなもすむてふ鳥の名の

たかのす浦の松をこたかさ

清水調元

○腰少浦神社 島巡り第三の拜所。中

津少童命を祀る

汐みては波もいははをこしはその

浦ふく風やはげしかるらん

中納言持豊

○鰐崎

比目魚

に似た

る石の

り故に

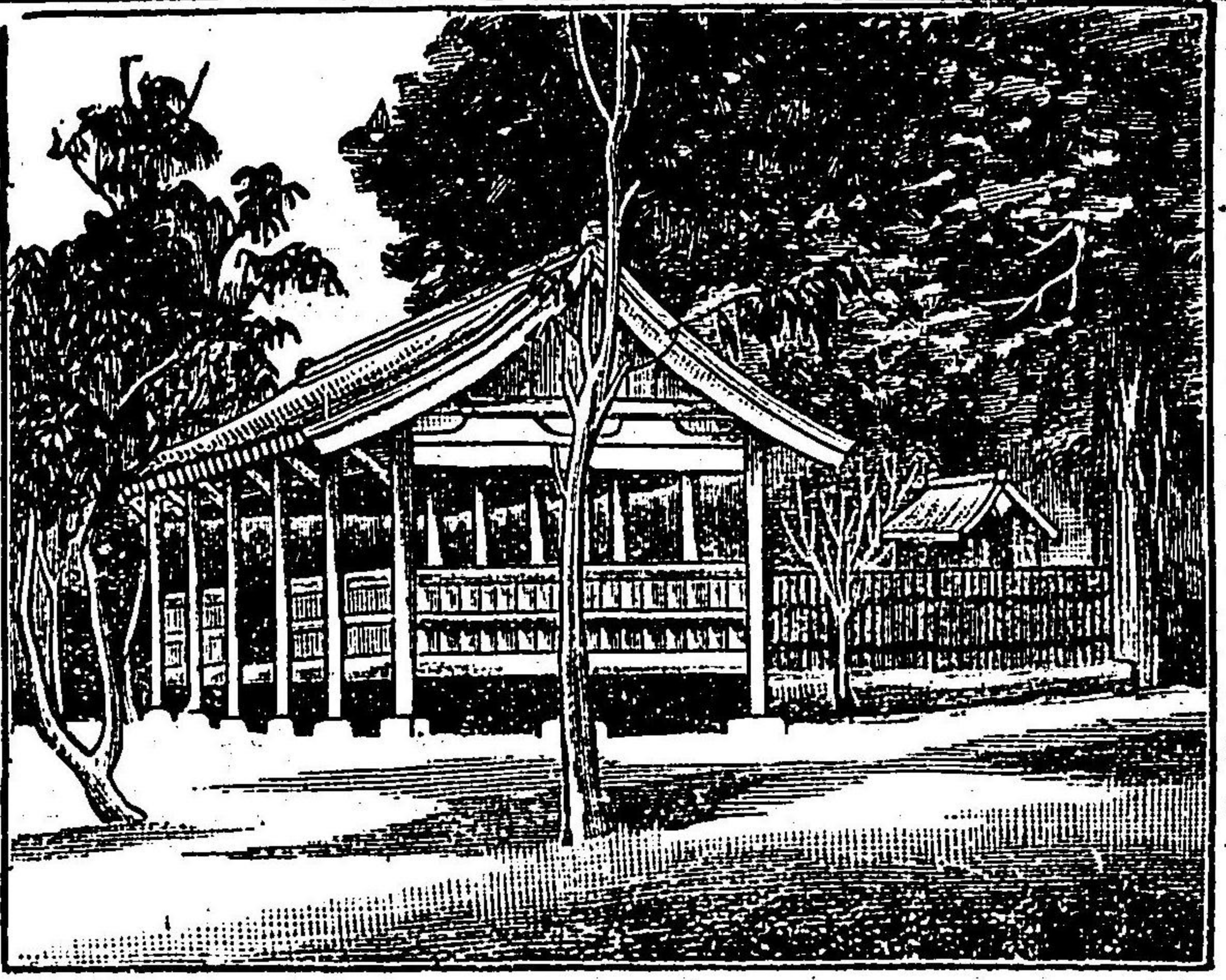
名づく



○青海苔浦神社 島巡り第四の拜所。

中筒男命を祀る。此所にて午飯の式あり。此浦より十三町ばかり山奥に高安が原と云る地あり。陶晴賢毛利氏に逐れて此所に遁れ來り終に自殺せりとぞ

影ひたす木々のみどりも青海苔の浦の名しるさ波のをもかな
持豊



○養父崎神社 此所は濱もなく洲もなく

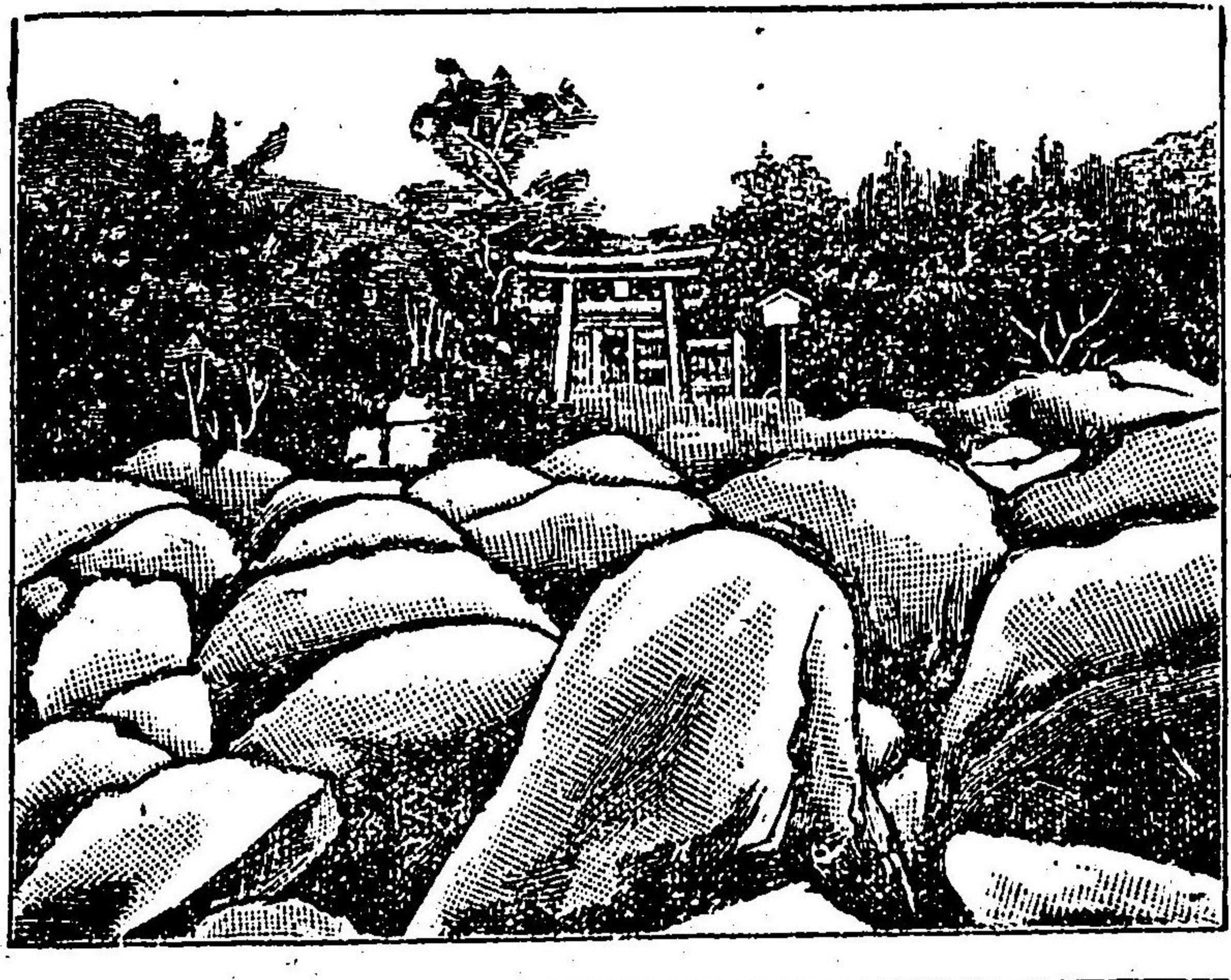
林木生茂り岩石峙ちて浪あらし。

七浦の外なり。靈鴉を祀る島巡りの時船中より拜し。鳥塚の式をあぐる

。其次第を下に記す

抑も此鳥塚の式と申は島巡りの時。祠官船ばたに立出で棗を海上に浮べ。鳥向樂を奏すれば神靈一雙忽ち山上より飛來り波に浮べる棗を啄へて御山に運ぶこと三度なり。是を鳥塚の式と云ふ。此式を行ふは願主の望によることなれば定まれる日とてなし

うたがふなからすは



島の花のかみ 篤老

かしてしな名さへ動かぬ山しろの
濱べにしめし神のみやわは

持豊

○山白濱神社 島巡り第五の拜所。表

津少童命を祀る

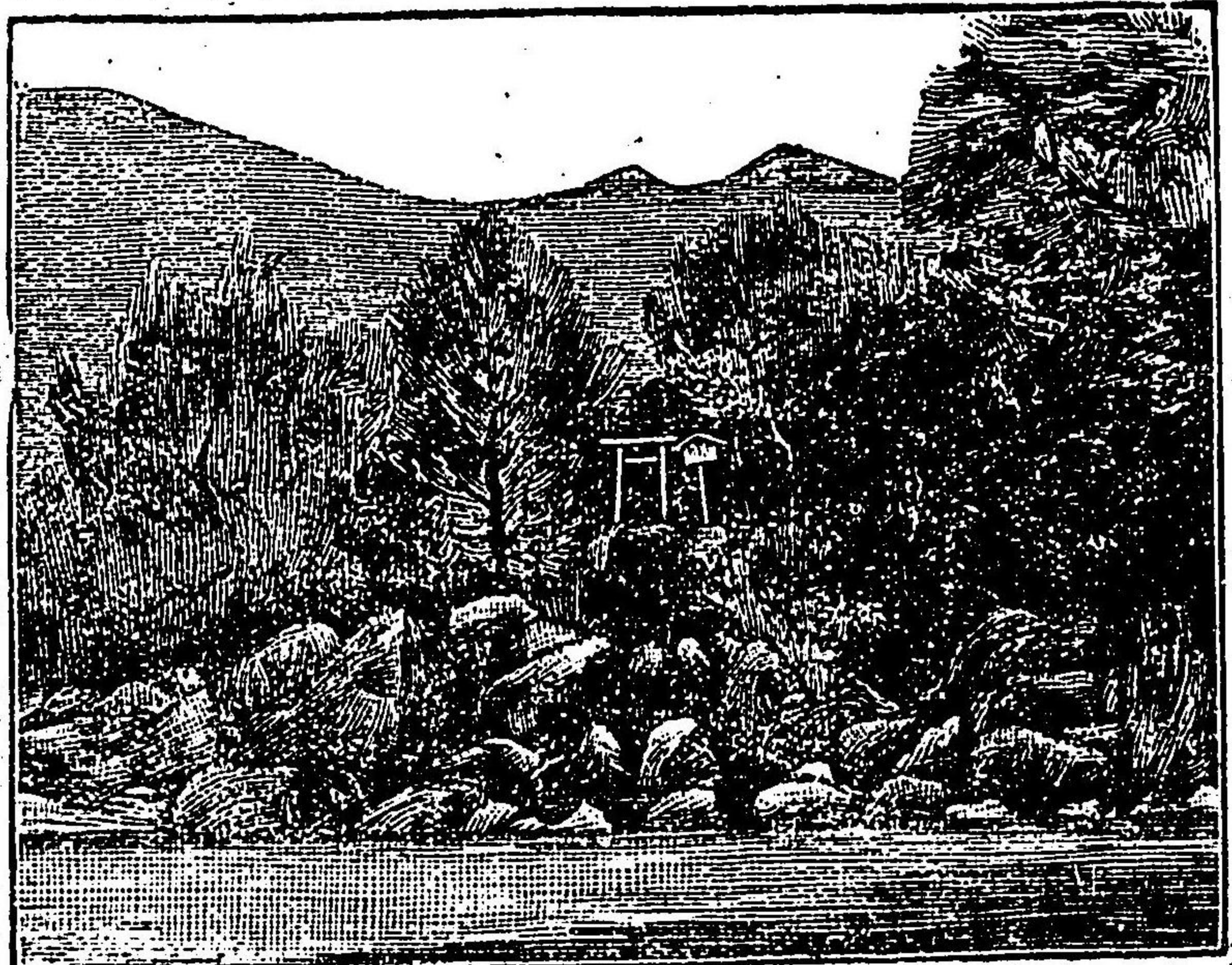
○葦籠崎 山白濱の南端なり。是より

西を島の表とす。同所に早咲の櫻の
り陸月の末より花開きて香色ことに
愛すべし

浦はるゝ須屋の朝なぎ夕なぎに

みるめはさこそたくびなからめ

持豊



○須屋浦神社 島巡り第六の拜所。表

筒男命を祀る。島巡りの時。餠餅の
饗あり如何なる所由と云事を知ら
ず。深しき由縁ならん

○磯の清水 磯際にあり。于潮の後一

小池をなし。湧出る水甚だ清冽なり
。船人是を汲て須屋の清水と賞す
あふげなは天降りましゝ

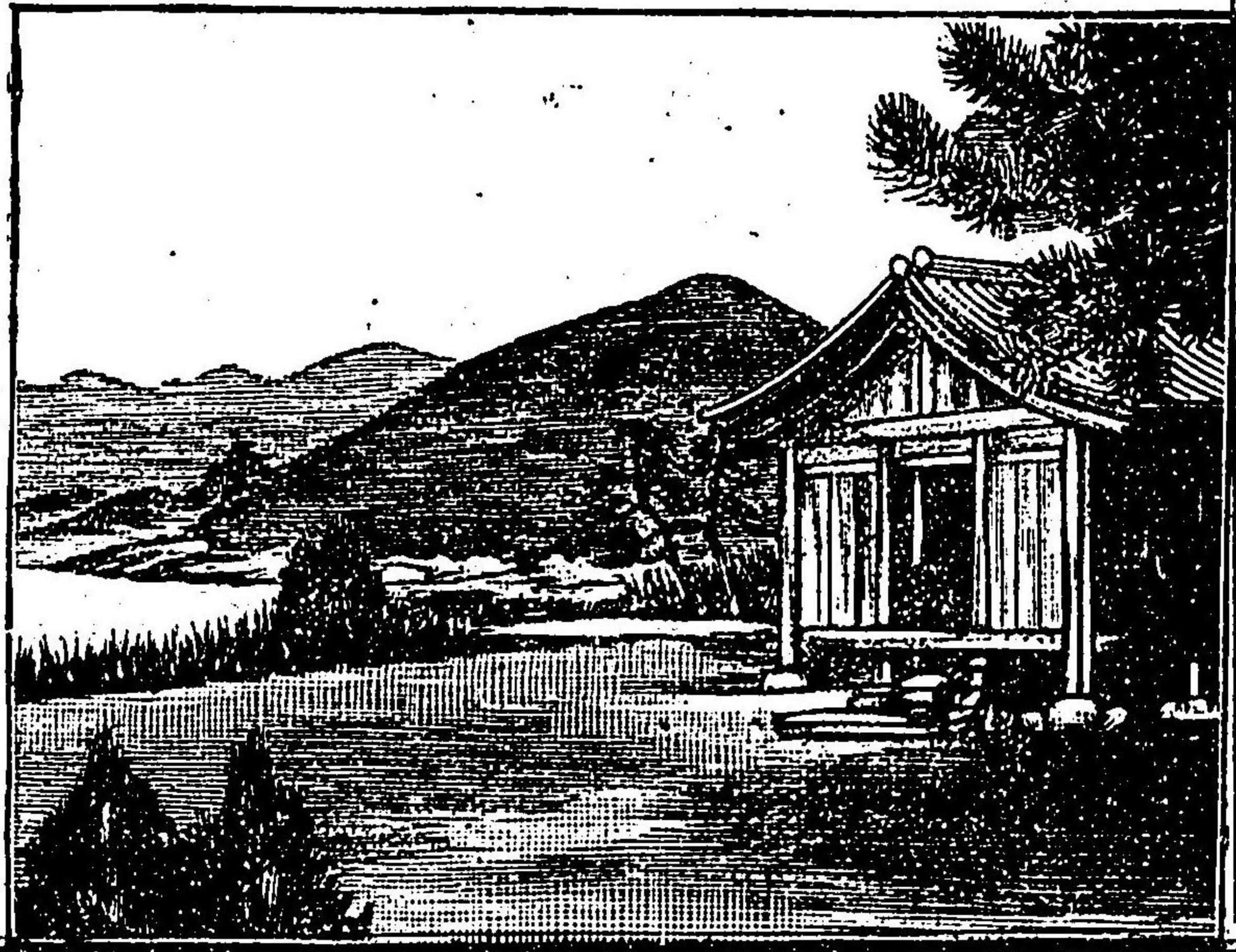
そのかみの

御床のいははうごき

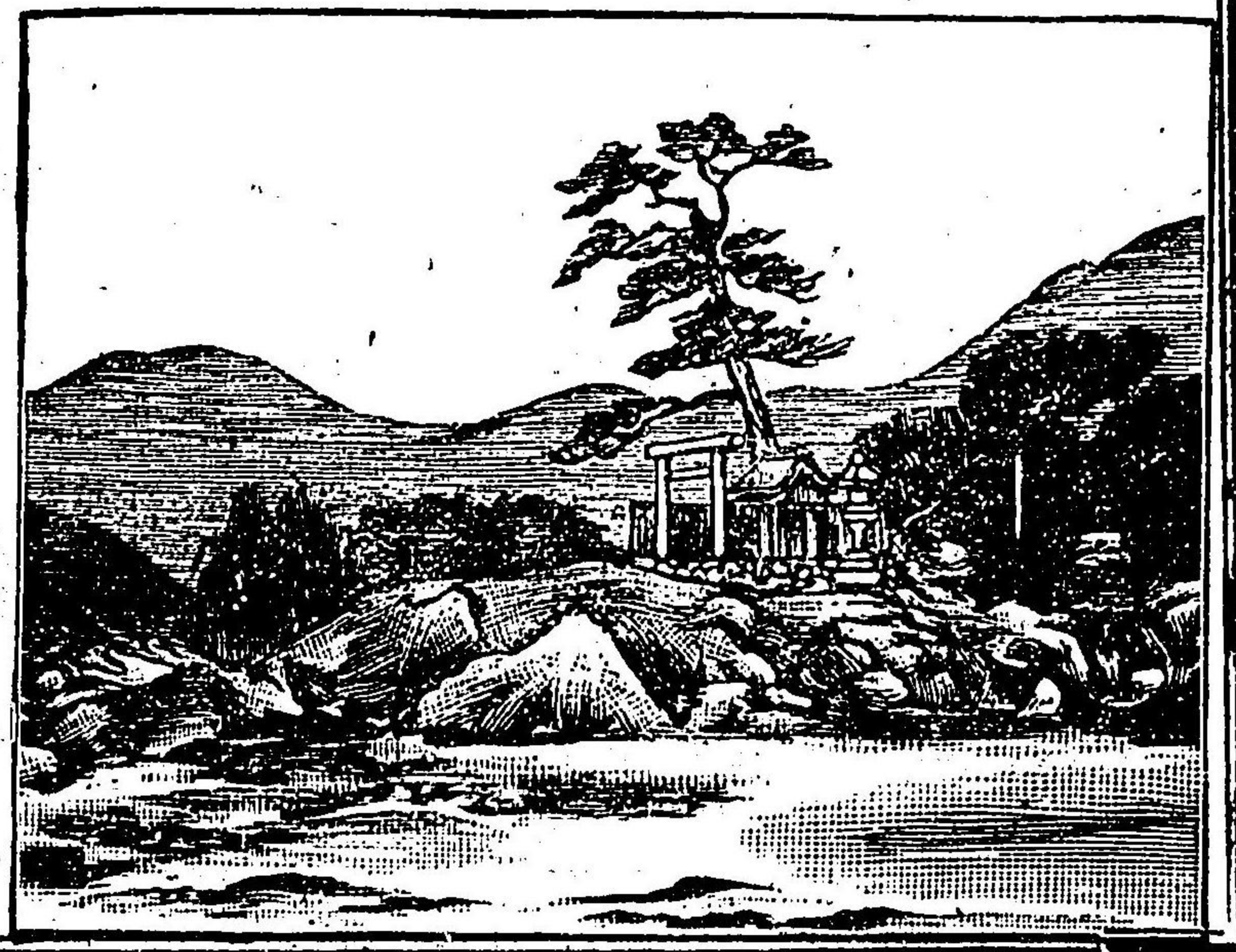
なきかけ

持豊

○御床浦神社 島巡り第七の拜所。市



杵島姫命を祀る。神殿大なる岩の上
に建り。傳へ云此浦は。本社三柱の
神。天降り玉ひし時の眞床なりと
○内侍石 大江浦にあり。傳へ云治
承年中徳大寺實定卿殿島へ下向あり
て。島の内侍有子を愛し玉ひしに。
歸京の時。別れ惜み此所まで送り來
りしにより此名あり。斯て後有子。
都を慕ふの余り船に乗り住吉の沖に
て
「はかなしや涙の下にも入ぬべし月
の都の人や見るとて。とうち詠じて
入水したりとぞ



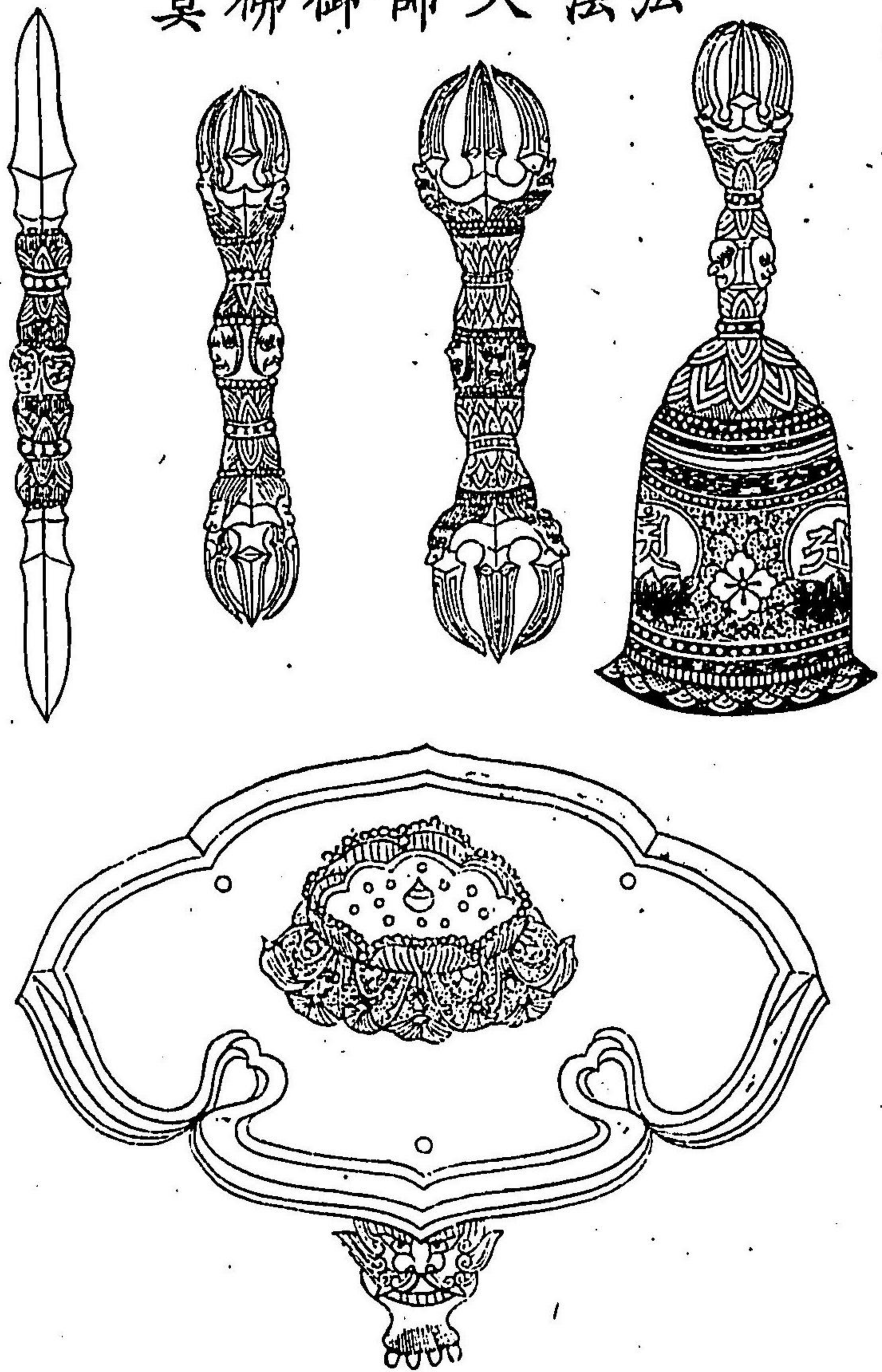
○瀬踏瀧 治承元年。平宗盛。御山へ寄附の巨鐘を鑄さしめたる所なり。春の頃少女
どもの打群て。貝拾ひに遊び歩行所なり
○網の浦 寶壽院本尊阿彌陀如來の上り玉ひし所なり。此邊至て櫻多し。此所より大
元浦へ越る道を花の洞と云ひしが實に其名空しからず
○寶物拜觀案内
數多の寶物は寶庫に納まれり。拜觀を望まると人は社務所について願ふべし
○假面 九面 △拔頭 △還城樂 △陵王 △納蘇利 △散手 △貴徳 △採桑老
△二の舞 △同塵
以上承安の頃。朝廷より御寄附のものなり。中拔頭の面は享和二年御覽に備へし
時。古物殊勝の品に思召れ大切に致すべく旨天翰を賜ふ
○奚類 假面と同時の御寄附なり
○兆 壹挺 同上 ○笙 五管
第一小櫻。第二春風。第三小男鹿。第四圓家丸。第五獅子と稱す中にも小櫻は高

倉上皇御愛翫の器なりしを治承四年
御幸の時御奉納ありし物なり
○高倉院天皇御扇 壹本 歌は久我通
親卿の手跡なりとぞ。地紙白骨は竹
の黒塗。要は銀
○槍扇 壹本 寄附人詳ならず。梅の
餘標。白縁。花。紅の火取。蒔繪。
銀泥 同壹本は公卿直衣くびがみは
た袖白身。薄縹らしぬき紺青。紋。
銀泥。要は銀盃金鍍の鳥
○安徳帝御産着唐櫃 黒塗時繪。鶴銀
。松金鍍。足。螺鈿研出し
○同帝御産衣 〇石帯 〇笏 〇綉履



○箆 〇扇
○黄楊の駒 六品何れも御翫具なり
○琴 平重衡の愛翫物なり。表裡とも斷文あり。唐の雷家の作なりと傳稱す
○菓 華 膏管 〇笛 三管
第一は駐腦にて造り第二は銅第三は異なるものにわらず中。にも駐腦の笛は。豊
臣秀吉征韓の時。彼國より贈りしを。毛利家に賜ひ同家より寄附ありしものなり
○沉 枕 寛文十三年。廣島。中島住。両替屋祐詮の奉納せしものなり
○弘法大師隨身佛具鈴杵靈盤 五品
大師の遺物多しと雖も袈裟。經卷の類は年を経るに隨ひ。破損せしかば。全き
を見ること能はず。然るに此佛具のみは。少しも替りたる事なく傳れり。實に千
載の至寶にあらずや。大師信仰の人は必ず。拜觀を願はざる可からず
○高麗笛 壹管 〇和琴 二張 〇箏 一張
法華と銘あり。律板柱とも添ふ

弘法大師御佛具



○琵琶 第一谷川。第二龍浪。第三磯浪。第四落月。第五無銘なり。中にも第一谷川は玄上を模したるものなりと最殊勝なるものなり。又第五は九條道房公の愛翫器なりと傳稱す。

○一遍上人の畫卷 當島の古圖 ○釣燈籠 壹個

○小松内府の古硯 ○太鼓 五挺 ○羯鼓 三挺

○二の鼓 壹挺 ○三の鼓 壹挺

○盤槍判木 壹挺 ○小忌衣 壹領

○法華經 八卷 ○書量品 壹卷

○壽命經 壹卷 以上高倉天皇の宸筆

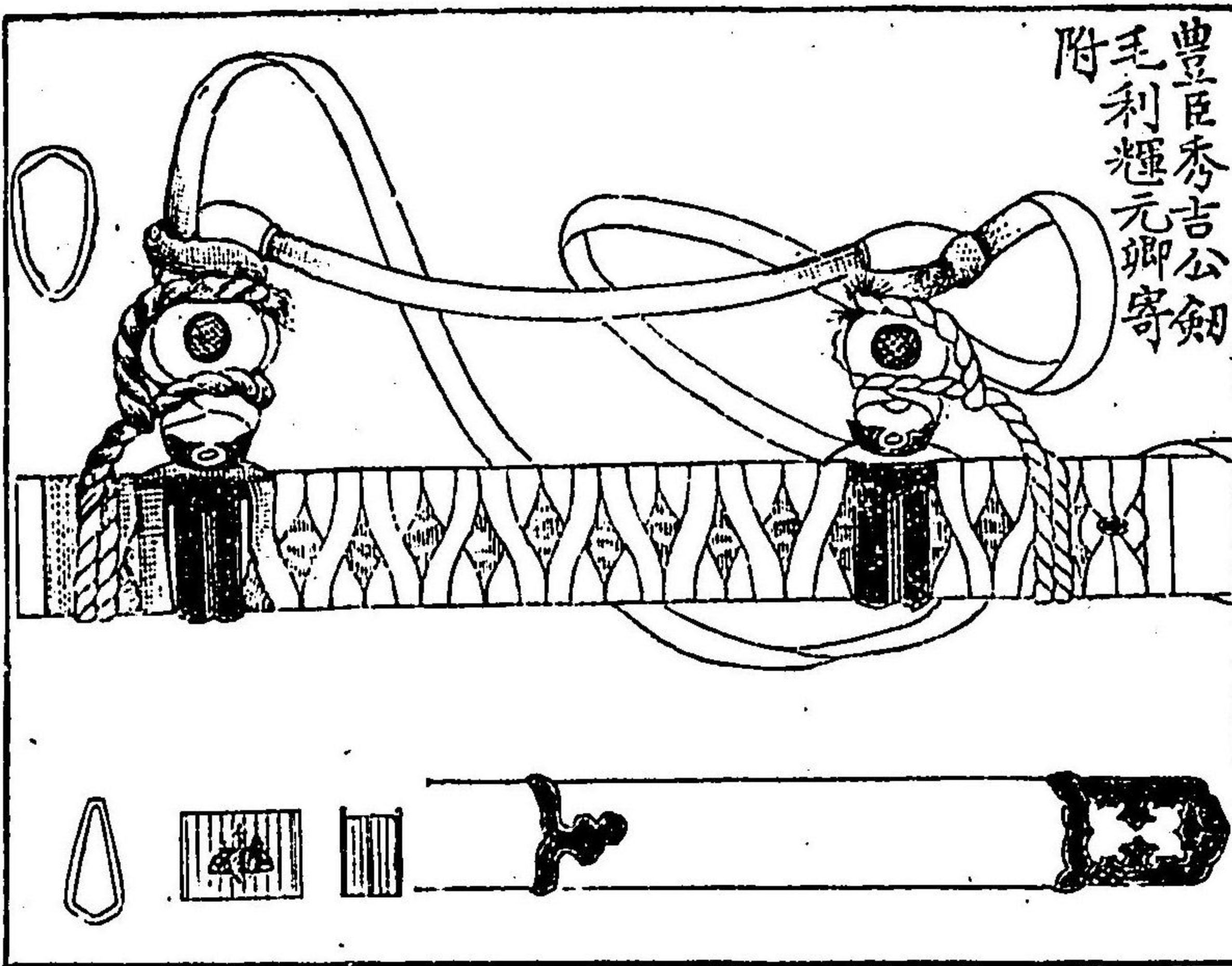
○經卷 壹函

法華經二十八卷、無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、心經、願文各一卷、都て三十三卷。平相國清盛公の寄附。中願文は公の自筆、余は一族三十二人各一卷を書寫せしものなり、其裝飾の結構實に當時平家の隆盛を見るに足れり。

- 兩筆法華經 平清盛 全賴盛の兩筆なり。八卷の中一卷を欠くかしいかな
- 理趣經 壹卷 ○般若心經 壹卷 俱に弘法大師の御眞筆なり
- 細字法華經 壹部八卷 弘法大師の眞蹟。外函堅三寸横二寸五分深壹寸七分。總金梨地文字金彩。字形の小さきこと推て知るべし
- 華嚴經 筆者不知反古の裡に寫したるなり
- 赤栴檀佛儀 一巻 異首羯摩作
- 古文書 二百十八卷 神領 制令 祭祀 然繕 寄進 雜翰等各部分なしたり
- 袈裟 壹肩 弘法大師隨身品
- 梁花物語 全部 松木内大臣宗條公の筆
- 奉納和歌 壹卷 藤原經尹郷の筆
- 和漢朗詠集 壹卷 冷泉爲成郷の筆

- 木島八景畫詩歌 三卷 諸名家の筆
- 百人一首 壹冊 外山光和郷の筆
- 香肥 壹卷
- 掛物 廿六幅。巨勢金岡。東福寺兆殿司。狩野探幽等の筆なり
- 硯 二面 ○墨 壹挺 ○文台 硯箱共 一脚
- 劔 二腰 承安年中。兩院御幸の時の寄附ならん
- 錦卷の短刀 壽永二年辰三月朔位下佐伯朝臣景弘調進とあり
- 兵庫鎖の劔 五腰 廢物作の一腰は將軍家より奉納し玉ひしものなり
- 錦卷藤卷の劔 堅田兵部少輔の寄附
- 毛利輝元郷助實刀 全上
- 扇鞘短刀 ○神息短刀 佐世石見守寄附
- 豐臣秀吉公劔 毛利輝元郷の寄附
- 毛利輝元郷寄附長義刀 ○毛利秀元郷寄附三原刀

豊臣秀吉公劍
毛利輝元卿寄附



- 未行劍 寄附詳ならず
- 毛利隆元朝臣の寄附鬘一文字刀
- 行平短刀 同朝臣の寄附
- 祐乗作小柄笄 天野下總守元明寄附大身短刀
- 菊一文字劍

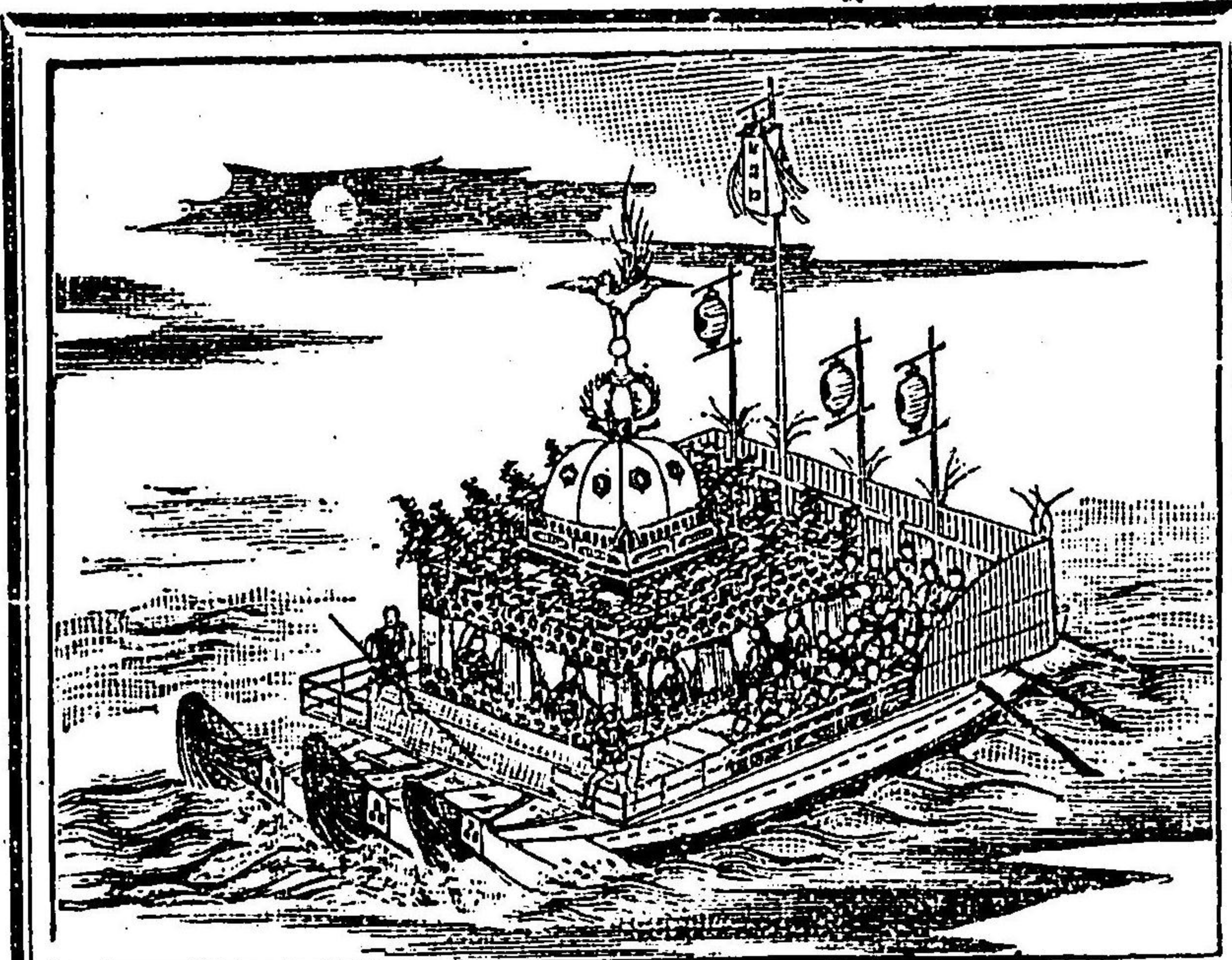
此所に記せざるを合して五十四口あり何れも銘作なり

- 西連刀 豊臣秀吉公刀 地藏信國
- 刀 國綱劍 陣刀 銘一文字劍 以上毛利輝元卿寄附
- 來國俊短刀 毛利元清寄附
- 足利尊氏將軍短刀 劍一口

寄附人詳ならず

- 新鋭切刀 吉川元長寄附
- 國行國俊兩作太刀 小早川隆景卿寄附
- 天國短刀 一腰 周防花岡住人野村吉兵衛寄附
- 正宗刀 森河内樵太郎家來藤井徳左衛門寄附
- 天國短刀 松野半左衛門眞良寄附
- 微塵螺鈿劍 寄附人詳ならず
- 世良隱岐寄附の劍二腰 平宗盛公の太刀
- 毛利元就卿の大身鎧
- 助次助家兩作太刀 棚守房顯寄附
- 能登守教經朝臣の太刀
- 稻光長太刀 毛利興元朝臣寄附
- 仁王清綱太刀 桂下總介寄附 木地螺鈿劍

- 小林長刀 此外刀劍數多あり何れも銘作なり
 - 井原小四郎弓矢 ○湯淺又七郎弓矢 ○渡邊彌十郎矢
 - 井上與次郎矢 ○新里孫七矢
 - 源義家朝臣甲冑 ○新羅三郎義光朝臣胴丸甲冑
 - 小松内府重盛公甲冑 ○大内義隆郷甲冑
 - 小櫻威甲冑 此一副は殊に古の名作なりと傳稱す
 - 又近來淺野家より寄附ありしは兜。面。鎧。胴。鐵。膝。鐙。籠。手。湯。當。大。袖。等。何。れ。も。名。作。な。る。中。に。兜。は。宗。磨。の。作。に。て。世。に。比。類。な。ら。ず。由。折。紙。に。見。へ。たり。
 - 古鏡 一面 ○曲玉 十二顆 ○七寶盃 ○青磁塔 一基 ○蘭奢待香
 - 一包 ○赤柳楳 ○沈の櫛 長五尺三寸餘 一本 ○青磁枕 ○銀獅子
 - 一頭 ○木馬 辨慶の飢物と傳稱す
 - 歌器 一具 ○古銅甲 二顆 ○古鏡 三百八十九枚
- 豊臣秀吉征韓の時納り玉ひし寶錢なり



菅柱船ノ圖

堅 三尺 横 五尺六

○菅祭の次第

陰曆六月十七日。此祭は御船三艘を組
て屋形を造り神輿を乗せ奉りて。神
官左右に列す。水主は烏帽子を冠り素
袍袴にて。各々棹を取る。又引船三艘
に艫を押並べて先に立大鳥居の前より
直に。地御前神社の廣前に渡り神事あ
り。樂を奏す。夫より本島に歸り長濱
神社。大元神社の前にて樂を奏し。御
船を大鳥居より本社火燒先に入れ祭式
最も嚴重なり。次に客神社の前にて樂

を奏すこと前の如くし。御船を玉の御池の内に入れ三回めぐらして本殿に歸るを例とせり

此祭式に神船の供奉として。廣島の町々より。御供船と稱し。狸々緋に種々の繪を纏たる幕を張り。幟。吹貫等を押立音曲を囃しつゝ祭禮の前夜廣島の川口を出。祭式に與り。翌日廣島に歸る。又諸所より集ひ來れる船は相接して海原狹しとす。此夜各船の帆柱。屋形等又戸々の屋上に獻する神燈幾數萬なるを知らず。遠近の男女是を見んとて群集すること又おびたし

○堂島産物にして人の能賞する物を擧ぐ

○色楊枝 形ち種々に削り五色に染めたる美しきもの

○杓子 大小あり古。島人清心と云人削り初たり

○木匙 近來は形種々に削りして最も巧みなり

○木盆 和々の模様を彫刻せり

○蘭 御山の深谷に生ず。石蘭。柔蘭。片葉蘭。鴛。蘭。岩千鳥蘭。孔雀蘭等の

・數種あり文容の盆栽として愛すべきものなり

嚴嶋名所案内記 終

明治廿九年第八月拾八日印刷

定價拾五錢

明治廿九年第八月廿四日發行

廣島縣安藝國佐伯郡嚴島
大町貳百貳拾八番屋敷

編輯兼發行人

山本寅吉

大坂東區北久寶寺町
貳丁目四拾四番屋敷

印刷人

田井久之助

